
そらのおとしもの～天使と仮面騎士の物語～

蒼き星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そらのおとしもの〜天使と仮面騎士の物語〜

【Nコード】

N6266P

【作者名】

蒼き星

【あらすじ】

デイケイドとデイエンドの発展型として作られたD2シリーズのライダーシステム。その内の1つ、ゲイザードライバーを持つ少年……工藤刹那は風都にいた。刹那は学業の傍ら幼い頃に会った初恋の相手である天使を探していた。しかし、世界にはそれを許さぬ者達 アロガンズ がいた。破壊の後継者ゲイザー、世界を駆け巡り、その瞳は何を見る？ 。そらおとの設定をかなりいじっています。

設定集

「キャラ紹介」

名前：工藤刹那くわじつせつな

性別：男

年齢：17歳

髪/瞳：朱色がかった茶色/金色

所属：風花高校2年

クラス：仮面ライダー

詳細：10歳の頃に両親をフォルスに殺されて以来、風都で義妹であるリインと2人で暮らしている。基本的に人と喋るのが苦手な傾向にあるが、お茶目な所もある。翔太郎や智樹（ここでは、仮面ライダー龍騎）とは幼馴染と言えるぐらい長い付き合いで、共に異世界に出掛けることもある。9歳の頃に1度だけ遊んだイカロスに思いを寄せており、学業に影響が出ない程度に搜索中。また、両親が殺された時、海東大樹に泣く泣くゲイザードライバーを譲渡されている。両親がいない工藤家の家計を株や狩りなど様々な手段をもつて支えている。実は、Angel Beats! 終了後の音無結弦と立華奏の間にできた息子で、その特殊能力を受け継いでいる。

名前：工藤リインフォース

性別：女

年齢：16歳

所属：風花高校1年

出典：魔法少女リリカルなのはシリーズ

詳細：刹那の義妹。5歳の頃、刹那の両親と出会い、その養子になる。基本的には優しく元気で自他共に認めるブラコンであるが、あ

る程度距離TPOをわきまえ、控えるようにしている。

名前：イカロス

性別：女

年齢：17歳

所属：無し（第1話） 風花高校2年（第2話以降）

出典：そらのおとしもの

詳細：空にある大陸「シナプス」の住人。8年前、人間界にやってきた時に刹那に助けられ、1日遊んだことをきっかけに恋心を抱くようになった。シナプスに帰った後も刹那のことが忘れられず、物語開始の直前に刹那を探すためにシナプスを飛び出したところ、空の歪みに巻き込まれ、ACE学園に迷い込む。そこで出会った前杉土樹とインハルト・ストラトスから刹那の居場所を教えられ、第1話に至る。本作では、シナプスのカードを使わずに海東大樹の手引き（ディエンドライバーによる不正入学）で主人公の学校に転校する。

「アロガンス」

地上に住む人間を至上の生物と考え、それ以外の生物（妖怪、神族、魔族など）を地球上から排除しようとしている秘密組織。同盟関係にあったミュージアムとは互いの技術を提供しあう関係にあった。ミュージアム壊滅後はガイアメモリ開発も行い、フォルスの隠れ蓑にしている。なお、アロガンスの名前元は、傲慢を意味する英単語の arrogance。

「フォルスについて」

ミュージアムと同盟関係にあったアロガンズが作り出した怪人。地球の記憶をメモリにするのではなく人の肉体に直接埋め込んで調整することで作り出された怪人。その技術は、ガイアドライバーに流用されるほどドーパントよりも安全性・使用性が高い。（ただし、ドーパントに比べて手間がかかるために量産性は低い。）ワームやオルフェノクなど他世界に出現した怪人の記憶から作られたフォルスもいる。一般兵であるソルジャーフォルスは各ライダー世界に存在する歴代戦闘員の記憶をベースに作られている。フォルスの名前は、力・暴力を意味する英単語の *force*。

「本作でのシナプス・世界観について」

本作では、シナプス人は金属と人間の特徴を併せ持つ種族として存在しており、エンジニアロイドという概念は存在していない。そのため、イカロス達も普通に暮らしている。直接関わる予定はないが、SHUFFLE!の世界観も混じっている。また、この物語の時間軸は、仮面ライダーWの原作終了後としている。

プロローグ

ここは、シナプス。天空に浮かぶ複数の島々から構成される私達の国。その内の島の1つから地上を眺めるのが私の日課でした。

「何してるの、イカロス？」

「ニンフ…」

私がぼーっと地上を見ていると、幼馴染のニンフがやってきました。

「また地上を見てるの？ あんたも飽きないわねえ」

「……………」

私はニンフの言葉には答えず、地上を見続けます。

「イカロスさん、ニンフさん、ここにいたんですか？」

別の方向からアストレアが駆け足でやってきました。でも、そんなに走ると…………、あ、やっぱりこけた。

「もう何やってるのよ、アストレア」

「こ、これくらい大丈夫です」

ニンフが慌ててアストレアに駆け寄りますが、アストレアは立ちあがり、私の所に歩いてきました。

「また地上を見ていたんですか。確か、8年前に男の子と出会ったんですって？」

「うん」

「そんなに気になるんですって、探しに行けばいいじゃないですか？」

「!? 私、何でそんな単純な事に気がつかなかったんだろう。でも…、

「今ごろ会いに行っても大丈夫かな？」

「大丈夫ですって。イカロスさんぐらいの女の子ならそこまでは価値がありますから」

その言葉を聞いた私は決心し、翼を広げます。

「アストレア、ありがとう」

そう言つて、私は飛び降りました。ニンフが何か言っているようですが、気にしなくていいでしょう。私はそのまま飛行することになりました。その時、急に大気が乱れて姿勢制御が乱されました。

「くっ！」

時々大気が乱れることがありますが、これほど乱れることは稀です。どうやら右から吸い寄せられている感覚があるので右を見てみました。そこでは、ブラックホールの様な穴が発生していました。これが、大気が乱れている原因のようですね。懸命に羽ばたきますが、じよじよに引きずられ、ついには穴の中に吸い込まれてしまいました。

ですが、怪我の功名とでも言うのでしょうか？吸い込まれた穴の先で会った親切な2人組が、私が探していた男の子のことを知っていて、場所を教えてくださいました。しかも、その2人組と仲の良い青年がその場所まで案内してくれることになったのです。

しばらく会っていませんが、彼……工藤刹那は元気なのでしょうか？

プロローグ（後書き）

ついに、ゲイザーの物語が始まりました。まだ主人公は出ていませんが…。

読まなくても話の流れが分かるようにはしていますが、ブラックホールに吸い込まれたイカロスが何処に行ったのか詳しく知りたい方は、自分が連載しているもう1つの小説「ACE学園」の第7話を読んでください。

最後に、更新速度は遅めですが、読者の皆さん、これからもよろしくお願いします。

第1話 『破壊の後継者／Iとの再会』

午前6時半。携帯にセットしておいた目覚ましが鳴ると、少年は目覚ましを止めて起床した。

「もう朝か」

少年……この話の主人公である工藤刹那は私服に着替えて2階から1階に降りた。刹那はリビングに入り、朝食を作るべく台所に立った。刹那が台所で朝食を作っていると、落ち着いた空色の長髪が特徴的な1人の少女が目をこすりながら降りてきた。

「お兄ちゃん、おはようございます」

「おはよう、リン」

「お皿と飲み物の準備、しますね」

「頼む」

少女……彼の義妹である工藤リンフォースは台所に入り、刹那の邪魔にならないようにお茶や食器の準備を始める。刹那はリンが準備した食器に朝ご飯を載せて、テーブルに持っていく。

「「いただきます」」

兄妹は手を合わせて食事を始めた。

「今日は日曜日ですが、何か予定はありますか？」

「智樹と町を散歩する予定だ。お前はそはらと買い物に行くんだっ
たな」

「はいです」

2人は楽しそうに喋りながら朝食を食べていった。朝食後、外へ出ると、近所の桜井智樹と見月そはらが待っていた。

「おはよう、刹那」

「今日は寝坊しなかったみたいだな、智樹」

「ひどいなあ、俺でもたまには早起きするって」

「リンちゃん、おはよう」

「おはようなのです、そはらさん」

工藤兄妹はこれから共に行動する相手に挨拶する。

「2人共、元気でな」

「トモちゃんこそ覗きは駄目だよ」

智樹とそはらの台詞を最後に2組は別れ、刹那と智樹はのんびりと風都を散歩し始めた。

「この街もようやく落ち着いてきたって感じだな」

智樹は風都の象徴である風都タワーを見上げながら言う。刹那もそれに合わせて過去を振り返る。

「NEVERがやってきた時は特に大変だったな。新型のエターナルメモリを使う奴のせいでもともに戦えるのが俺とお前と翔太郎さんの3人だけだったからな」

「あのオカマもやたらと絡んできやがったからな、メダルを使う仮面ライダーが来てくれて助かったぜ!!」

「風花高校に殺し屋が出た時は、面白かったな。ドーパントがそはらの殺気に当てられて逃げたんだからな」

「普段からあの殺気を当てられている者としては複雑な気持ちだな

…」

刹那と智樹はこれまでの戦いを思い出しては懐かしそうに語り、平和を噛みしめるように1歩1歩足を進めた。すると、途中の大きな桜の木がある風都公園で見知った顔の探偵がいたので刹那は声をかけた。

「翔兄、何をしているの？」

「おお、刹那と智樹か。依頼でペット探しをしているんだよ。お前からこそ何をしているんだ？」

「散歩しながらこれまでのことを振り返っていたんだよ、いろいろあったからな」

「そうか。いろんな出会いと別れがあったからな、照井との出会いとか…霧彦の死とか…」

探偵……左翔太郎はソフト帽を深くかぶりながらしんみりと話す。じゃっかん雰囲気は暗くなる中、刹那はふと空を見上げた。

「そう言えば、あの時の女の子はどうしているんだろう？」

刹那は空を見上げながら1人の女の子のことを考える。

「あの子？ ああ、幼い頃に1日だけ遊んだっていう翼が生えた女の子のことか？」

「そうだよ、翔兄」

「お前も隅におけねえな、刹那。あんなに可愛い義妹と同居しているのに別の女の子を追いかけているなんてな」

「からかわないですよ、翔兄」

翔太郎が肘で刹那を小突きながらじゃれる。その時、空から何かが高速度で飛来し、3人の前に着陸した。

「うわっ！」

「何だ、いったい！？」

3人は飛行物体が着陸の際に発した衝撃波に耐えられず、顔を手の平で覆う。20秒ほど立って刹那が手の平をどけた時、目の前に存在していた物を見て驚愕した。

「イカ……ロス……」

眼前に存在していたのは、後ろで2つに分けた紅い長髪に同じ色の翼、緑の瞳を持つというまさに天使というべき少女だったのだ。

「噂をすればなんとやらだな……」

未だ混乱している高校生2人とは違い、割と冷静なハーフボイルド。

「俺はハーフボイルドじゃねえ!!」

電波を受信した翔太郎を放置し、イカロスは刹那に近づいた。

「すみません、遅くなってしまいました」

「それは、こっちも同じだ。そんなことよりもまずは再会を喜ぶべきだ。久しぶりだな、イカロス。ずっと会いたかった……」

「久しぶりです、刹那」

イカロスは挨拶した後、無言で刹那の左手を両手で優しく包み込んだ。

「刹那の手、8年も立っているのに相変わらず暖かい」

刹那もイカロスの手に自分の右手を重ね合わせる。

「イカロスこそこの8年の間にずいぶんと魅力的になった」

「刹那…」

「イカロス…」

すっかり蚊帳の外になっている翔太郎と智樹は2人を暖かく見守っていた。

「あれが、刹那がずっと探していた女の子か。確かにかなり可愛いな」

「刹那が御執心になるのも無理はねえな」

「刹那、この8年間あなたと一緒に居たい、遊びたいと思うことが何度もありました。これが、好きという感情だということに気づくのに長い時間がかかりました」

「俺も好きだ、イカロス」

この日、1組のカップルが誕生した。

「良かったな、刹那」

「なんかこっちまで幸せになってくるな」

小さい頃から刹那のことを知っている智樹と翔太郎は素直に2人を祝福した。

「しかし、何でここが分かったんだ、イカロス？」

「土樹さんとアインハルトさんが教えてくれたんです、あなたがこの町で仮面ライダーとして暮らしていると…」

「あの2人か」

刹那は今もどこかでイチャイチャしているであろうバカップルを頭に思い浮かべる。

「後、土樹さん達と仲が良い大樹さんがこの町で暮らすための準備をある程度してくれた上で連れて来てくれました」

「大樹さん、あなたはいったい何を考えているんだ？」

普通とかけ離れた思考を持つ通りすがりの怪盗に頭を抱える刹那。久しぶりの会話を楽しむ2人に翔太郎が近づく。

「イカロス、この町で暮らすのは良いんだが、親御さんはこの件を御承知なのかい？」

翔太郎に質問された瞬間イカロスが固まった。

「話してなかったんかい!？」

「すみません、刹那に会うことしか考えていなくて…」

「ハハハ、ずいぶんうっかり屋な天使だな、イカロスは」

「智樹、イカロスは昔からこうだ」

イカロスの親の件はさておき刹那はイカロスと出会えたことを喜び、これからの日々に思いを馳せていた。

第2話 『驚愕の転校生／忍び寄るFの影』

【風花高校】

「へえ、ようやくイカロスさんと出会えたんだ。良かったね、せっちゃん」

朝のHR前、刹那は同じクラスのそはらにイカロスと再会できたことを話していた。

「ああ…」

「あれ？あまり嬉しそうじゃないね。何かあったの？」

「実は、あの後イカロスが母親のダイダロスって人と話して正式に家に居候することになった」

「？ それ、むしろ喜ぶべきだよね」

初恋の人と再会できたというのに意外とテンションが低い刹那にそはらは頭を傾げる。2人の話を聞いていた智樹が苦笑いを浮かべながらその理由を説明する。

「実はさ、ラインが『お兄ちゃんのお嫁さんになるのは私です！』」

とイカロスに宣戦布告してさ、そっちとどう向き合うかで悩んでいるんだよ、刹那は。法律で2人の結婚は可能だからさ」

「ハハハ、せつちゃんは大変だね」

「翔兄とかにもよく相談して考えないとな」

3人がそんな風に話していると、クラスの担任が入ってきて、生徒達に席に戻るよう告げた。

「今日は、転校生の紹介をする」

担任の一報でクラス中がざわめく。

「入りたまえ」

担任の声と共に1人の転校生が入ってきた。その姿を見た時、刹那と智樹の目が点になった。

「転校生の威伽露主イカロスさんです」

「…よろしくお願いします」

目の前に転校生としていたのが、前日付けで工藤家の居候になったイカロスだったからである。

「あの子、すげー可愛いな」

「背中の翼も綺麗だね」

「あれだけ可愛いならせつちゃんが夢中になるのも無理はないね」

突如転校してきた美少女にそはらを含めたクラス中が釘づけになる。

（何故イカロスがここにいる！？　そう言えば昨日）

「後、土樹さん達と仲が良い『大樹』さんという人がこの町で暮らすための準備をある程度してくれました」

（あの人、ディエンドライバーの力でイカロスを不正入学させたの

か…)

「イカロスさんの席は工藤の後ろだ」

「分かりました」

イカロスは普通に刹那の後ろの席に移動して座った。

「刹那…、先程から黙っていますけど…どこか調子が悪いんですか？」

「少し驚いただけだ」

「そうですね」

その会話を聞いていた女子の1人が2人に質問する。

「イカロスさんと工藤君、知り合いみたいだけどどういう関係なの？」

「恋人だ(です)」

あまりに息の合った2人の返答に周りは騒ぐが、当の本人達は放置することにした。

「分からない事があつたら俺に質問しろ。出来る限り力になってやる」

「私も力になるよ、イカロスさん」

「お世話になります、刹那、そはらさん」

【1時間目・世界史】

（よし、上手く書けたっつと）

そはらは地図も含めてオーストラリア大陸について簡単に板書した。時間がないので少し子供っぽい感じだ。

（イカロスさんはちゃんと書いているのかな？）

そはらがイカロスのノートを見ると、

（っ！！？）

そはらは愕然とした。ベートーヴェンの運命が聞こえてきそうなくらいに素晴らしくイカロスのノートがまとめてられてあったからだ。

(……………)

惨めな気持ちになったそはらはノートを消して書きなおすことにした。

【2時間目・家庭科】

「すげえよ、あの2人」

「もはや高校生のレベルじゃねえよ」

家庭科では、ほぼ刹那とイカロスの独壇場と化し、もの凄いペースで料理が作られていった。作ったのは、2人共チャーハンである。刹那は出来あがった自分のチャーハンを味見した。

「まあまあだな。イカロス、お前のチャーハンを少し味見させてくれ」

「はい」

刹那はレンゲでイカロスがチャーハンを口に含んだ。結果、

「俺の負けだ」

「……家庭科だけは負けるわけにはいきませんから。特に、好きな人にだけは」

イカロスは刹那のチャーハンを食べた。

「自信を持ってください。あなたもなかなかの腕です」

刹那は素直に負けを認めて、両者は握手し、クラス中が2人の健闘を讃えた。

時間がないので割愛するが、それからの授業でもイカロスがその頭脳を見せつけたのは言うまでもない。

【放課後・帰り道】

刹那は智樹とリインにイカロス、イカロスに力の差を見せつけられて落ち込んでいるそはらと帰宅していた。

「まさかイカロスがあれほど凄いななんて思いもしなかったよ」

「1年でも大騒ぎでしたよ、謎の天才美少女が現れたって」

「すみません、お騒がせしてしまって…」

「気にするな、人間というのは突発的な出来事に弱いからな」

智樹、リイン、イカロス、刹那の順で喋りながらそれぞれの家に向かって歩く。

「そうだぜ、イカロス。平和が1番だが、多少は刺激がないと人間は生きていけないからな」

「智樹さん…」

智樹もイカロスを励ます。ちなみに、そはらは未だに喋る気力がわいてこないようだ。

「それはそれとして、お兄ちゃんは無事ですねよ」

リインがそう言って刹那の腕に抱きつく。

「リ、リイン」

「…それは、こちらの台詞です」

イカロスそれに対抗して刹那の左腕に抱きつき、両者の間で火花が散る。刹那は2人の行動に困惑する。

「ふ、2人共…」

刹那が呼び掛けても2人は返事せず、それを見ていた智樹は苦笑した。

風都の路地裏。その一角では、分厚い装甲の赤いライダーが1体の怪物と戦っていた。

「これで終わりだ！」

赤いライダー 仮面ライダーアクセル は止めを刺すべく右手に持っていたエンジンブレードにガイアメモリと呼ばれる銀色のUSBメモリの様な物を挿入した。

ENGINE: MAXIMUM DRIVE

アクセルは両手で剣を持ち、Aを描くように怪物を切り裂いた。アクセルの攻撃に耐えられずに怪物は爆発し、後には何も残らなかった。

「メモリが排出されないだ！？ ドーパントでは
まさか！？」

変身を解除したアクセル……風都警察署の照井竜はその状況に驚いていたが、あることに思い至って更に驚いた。

「ドーパントと似たような能力、倒しても排出されないメモリ……。これが、刹那の言っていた『フォルス』なのか！？ また忙しくなるな」

そう言いつと、照井はすぐさま自分の職場へと戻っていった。

第3話『その名はゲイザー／忍び寄るFの影』

【鳴海探偵事務所】

「フォルスが出たって本当なんですか、照井さん!？」

「ああ。非常に分かりにくかったが、以前お前が話した特徴と一致していた。恐らく間違いないだろう」

翌日、学校を終えた刹那は翔太郎がいる探偵事務所に直行し、そこで照井からフォルスについて聞いていた。ちなみに、智樹は女子更衣室を覗いてそはらからお仕置きとして殺人チヨップを食らったため、現在はベッドの上である。

「ねえねえ、フォルスって何なの？」

探偵事務所所長で照井の嫁である亜樹子はフォルスが何なのか分からないため、質問する。

「それは、僕が説明しよう」

左手に本を持っている、刹那と同年ぐらいの少年 フィリップが前に出て説明を始めた。

「フォルスとは人間とは別の存在……神族や魔族、妖怪などの根絶を唱えるアロガンズという組織が作った特殊な改造人間のことだよ。分かりやすく言えば、記憶をメモリではなく肉体に直接埋め込んだ人間だよ」

「改造人間！？ 私、そんなの聞いてないし！！」

フィリップの説明に亜樹子は動揺するが、いつものことなので一同はスル する。

「同盟関係にあったミュージアムが滅んでガイアメモリ事件が終息を迎えつつある中でフォルスが出てきたって事は、アロガンズがいよいよ本格的に動き出すってことか？」

誰もが疑問に思っているであろう懸念事項を口に出すと、刹那が無言で頷く。

「帰ったら、皆にも警戒を促しておくよ、翔兄」

「警察でも対策を練っておく」

「ああ、元気だな」

翔太郎の言葉を最後にその場は解散した。

一方、そのころ女性陣は

「あっちが肉屋で、こっちが八百屋」

「後、魚屋に薬局はそっちですね」

「ありがとうございます、そはらさん、リンさん」

「気にしないでくださいです、イカロスさん」

リンとそはらが土地勘のないイカロスに風都の案内をしていた。

「だいたい案内したし、ちょっと喫茶店で休憩しようか、2人共」

「そうですね」

2人がそう言ってイカロスを喫茶店に連れていこうとした時、急に商店街が騒がしくなり、3人が前を見ると、大勢の人々が必死に何

かからイカロス達の居る方向に逃げてきた。

「な、何が起こったの!？」

そはらは突然の事態に慌てるが、イカロスとリインは冷静だった。

「うわあああああ!！」

吹き飛ばされた1人の男性が地面に激突する音と共に複数の怪人が現れた。隊長と思われる虫のような怪人が1体と兵隊の様な怪人が5体である。町を破壊していた怪人達の1体がリイン達に気づき、走り寄ってきた。

33

「2人共、逃げますよ」

「分かりました」

イカロスが2人に呼び掛けるとリインは返答するが、

「あ…ああ……」

そはらは目の前の存在に恐怖し、足が震えて動けない状態だ。

「そはらさん!!」

リインが肩を揺らす、そはらは何も反応を示さない。その間にも怪人は近づいてきて、3人に刃を振り下ろそうとしていた。

「くっ!!」

3人の命が失われようとしたその時…、

1台の白いバイクが怪人をはねた。

「大丈夫か、3人共!!」

「お兄ちゃん!!」

「刹那!!」

ヘルメットのバイザーを上げた刹那は3人の無事を確認する。

「リイン、2人を連れて下がっている」

「はい！ 行きますよ、2人共！！」

リインはイカロスと一緒にそはらを引きずりながら近くの物陰に隠れた。

「ワームタイプが1体、量産タイプのソルジャーフォルスが1個小队か」

刹那は眼前に存在する敵戦力を分析すると専用バイクであるゲイズチエイサを降りると、腰にベルト……ゲイザードライバーを巻いて右手にカードを持った。

「変身！」

K A M E N R I D E : G A T H E R

刹那がバックルにカードを挿入すると、電子音と共に出現した複数のシルエットが刹那の体に重なり、その体を変えた。全体的に白く、ところどころ金色のラインが走った白の仮面騎士。それが、工藤刹那の変身する仮面ライダーゲイザーだ。

「仮面ライダーだと！ 待て、我々は世界平和のために戦っている

！ この世にはびこる害虫を駆除するのに手を貸してほしい！」

ソルジャーの1体がゲイザーを勧誘するが、ゲイザーはそれを無視してライドブツカー？をソードモードに変形させながら接近し、一気に振り下ろして爆散させた。ソルジャーを問答無用で切り倒したゲイザーは怒りで手を震わせながら言った。

「ふざけるな！ お前らアロガンスがやっていることは不当な差別に虐殺以外の何物でもない！」

それを聞いた隊長のセパルクユラフォルスは残念そうに言った。

「ならば、仕方がない。ここで死ね！！」

セパルクユラフォルスの命令でソルジャー達がゲイザーに斬りかかった。ゲイザーもそれを迎え撃つべく剣を構えた。先に突っ込んできた3隊は、糸を縫うように動きながら胴体を真っ二つにした。背後から襲ってきた1体は回し蹴りで体勢を崩してからライドブツカーで貫いた。

「馬鹿な…、ソルジャー部隊があつという間に全滅だ！」

「勝敗は決した！ おとなしく投降しろ！！」

ゲイザーがライドブツカーの剣先を向けながら降伏勧告を出す。

「まだまだ！ まだ勝敗は決していない！！」

そういうと、セパルキュラは急に目にも止まらない速度で動き出した。

「ワーム特有のクロックアップか」

ゲイザーは冷静にブツクモードにしたライドブツカー？から1枚のカードを取り出してバツクルに装填した。

A T T A C K R I D E : C L O C K U P

ゲイザーもセパルキュラに対抗してクロックアップを使い、異なる時間の流れに身を置くことで周囲の存在が止まって見えるようになった。セパルキュラフォルスはゲイザーがクロックアップしたことに一瞬動揺するが、すぐさま右手の武器で斬りかかる。ゲイザーはライドブツカー？を变形させる時間が惜しいといわんばかりにその攻撃をかいくぐって殴る蹴るの攻撃を加えて次々とダメージを与えて吹き飛ばす。

「とどめだ」

ゲイザーは必殺の一撃を決めるべくカードを1枚取り出して使用する。

R
FINAL ATTACK RIDE:G・G・G・GATHER

ゲイザーはジャンプして右足を突き出し、目の前に展開された10枚のデイメンシオンフィールドを通過して必殺の蹴り……デイメンシオンキック?を叩き込んだ。

CLOCK OVER

それと同時にゲイザーの時間の流れも元に戻った。敵の全滅を確認したゲイザーは変身を解いた。

「3人共、大丈夫か？」

「お兄ちゃん！」

リインは刹那に駆け寄り、その胸にダイビングする。

「うおっ」とー

リインのあまりの勢いに刹那は後ろに倒れそうになるが、何とか踏みとどまる。

「よしよし」

刹那がリインの頭を撫でていると、イカロスも静かに近寄ってきて抱きついた。

「イカロス？」

「振りほどかないでください……、さっきは本当に死ぬかと思ったんですから」

「そうか」

刹那はリインを撫でるのを止めてイカロスを優しく抱きしめた。

「むー、イカロスさんだけです。なら、私は」

リインはそういって目をつぶり、そのまま刹那にキスした。

「えっ
」

刹那とイカロスは数秒ほど呆然とし、その事実を認識した時に驚愕した。

「な、何をす、するんだ、リイン」

「何って……、キスですよ」

刹那は義妹の不意打ちによって完全にテンパっていた。

「リイン……、何をしているんですか？」

イカロスは瞳の色が赤くなり、戦闘態勢に入った。

「イカロス、お前こそどうしたんだ？」

「気にしないでください。少し本気でリインさんとOHANASHIするだけです」

「望むところです、イカロスさん」

ラインも臨戦態勢に入る。2人は、刹那から離れて互いに構え、今にも一戦交える空気になった。

「ふ、2人共、こんなところで喧嘩はよせ！」

ちなみに、近くで3人のやり取りを目撃していた人物がいる。言うまでもないが、そはらである。

「私、絶対に忘れられているよね……」

そはらの叫びは空に虚しく響いた。

仮面ライダーゲイザーについて

外観：全体的なデザインはデイケイドを踏襲しているが、全身が白で所々金色のラインが走っていて、騎士を彷彿とさせるデザインになっている。腕部には近接戦闘用のスモールシールドが取りつけられている。

武器：ライドブッカ？

詳細：ACE学園に居る前杉士樹が用いるアクエリアスとついになるD2シリーズのライダーシステム。元になったデイケイドとは違い、単独で世界間移動をすることも出来る。ライドブッカ も刃がじゃっかん大型化し、全体的な能力も近接戦闘を中心にして底上げされている。デイケイドに搭載されていたインビジブルやスラッシュなどのアタックライド、ファイナルアタックライドも強化した上で受け継いでいる。原作デイケイドで土のデイケイドライダーがアポロガイストに吹き飛ばされたり、大樹のデイエンドライダーが外道衆に奪われたりした経験から遠距離から召喚出来るようになっていて（ライドブッカ？も含まれる）、メインの変身者（または資格者）の命令に最優先で従うようになっていてる。

「専用バイクについて」

名前：ゲイズチェイサー

外観：基本カラーの白に金色のラインが走っている。

武装：内蔵式ガトリングガン

詳細：マシンディケイダーのデータを元に開発されたバイク。並行世界に存在するライダー関係の技術スタッフ達が誕生日プレゼントとして刹那に送られた。刹那の資質に合わせてある程度バランスを取った上で近接戦闘をこなせるように調整されている。

「ゲイザーの使用カード」

カメンライド（または、その他の変身）カード

- 1 . 仮面ライダーゲイザー（オリジナル）
- 2 . 仮面ライダーキバ（仮面ライダーキバ）
- 3 . 仮面ライダー轟鬼（仮面ライダー響鬼）
- 4 . デルフィン（ブレイクブレイド）
- 5 . 仮面ライダークウガ（仮面ライダークウガ）
- 6 . 仮面ライダーファイズ（仮面ライダーファイズ）

アタックライドカード

- 1 . クロックアップ
- 2 . スラッシュ
- 3 . ブレイクインパルス
- 4 . マグネット
- 5 . サイドバッシュ
- 6 . ギガント
- 7 . オートバジン

フォームライドカード

- 1 . キバ・ドツガ
- 2 . クウガ・ドラゴン
- 3 . クウガ・ペガサス

ファイナルアタックライドカード

- 1 . デイメンションキック? (ゲイザー)
- 2 . デイメンションスラッシュ? (ゲイザー)
- 3 . ライダースティング (ザビー)
- 4 . 音撃斬 雷電激震 (轟鬼)
- 5 . アブソリユートスラッシュ・封滅 ゲイザー・エピオン
- 6 . クリムゾンスマッシュ (ファイズ)

「ゲイザー・エピオンフォームについて」

名前：ゲイザー エピオンフォーム

外観：赤色で、力強く流麗なデザインで背中に機械的な翼がある。

武器：ライドブッカー?、ニヴルヘイム、左腕のシールド内臓型ヒートロッド

説明：工藤刹那が「Angel Beats!」の物語の後に転生した音無結弦と立華奏から受け継いだ力を解放した形態。分類的にはデイエンド・チノナマコ態に近い。高い空戦能力と近接戦闘能力を誇り、ヒートロッドを使うことにより中距離戦闘もこなす。アクエリアス・ゼロ同様に高度な未来予測能力を使用可能である。強化変身に伴い、他のライダーの力を借りずにFINAL ATTACK K R I D Eを連続使用できるようになっている。

必殺技：

- 1 . アブソリユートスラッシュ・極光
- 2 . アブソリユートスラッシュ・封滅
- 3 , 4 , 5 . ノーマルフォーム時に使える必殺キック、斬撃、砲撃の強化バージョンで、語尾に・エンハンスドが付く(例：デイメンションスラッシュ?・エンハンスド)。

使用武器：凍魔劍ニヴルヘイム とうまけん

説明：ゲイザーの最強形態「エピオンフォーム」用の武器。後述のアクエリアスバスターとは違い、変身しなくても使うことが出来る。過去に刹那の母親が使っていた魔剣である。

スペック：

1．とても頑丈で、強大な氷属性を持ったために自己再生能力がある存在（アンデッド等が相手でも腕次第で変身せずとも上級クラスと渡り合える）に有効。切れ味もザンバットソード並に鋭い。エネルギーを大量に注ぎ込めばライオットザンバーの様なエネルギー刃も形成（アブソリュートスラッシュ・極光）したり、高い再生能力を持つ存在も封印しながら倒す（アブソリュートスラッシュ・封滅）ことが可能。

2．実剣だが、鞘は存在せず、通常時は柄だけで必要な時に刃が形成される。待機形態が柄になるだけのアームデバイスと考えればいい。また、立花道雪さんのキャラであるイルスイの改修により柄の先端には最高級サファイアが埋め込まれている。

仮面ライダーゲイザーについて（後書き）

そろそろ大学のテストがあるので、あまり更新が出来ないかもしれませんが。

申し訳ありませんが、しばらくお待ちください。

第4話『不死身のM/新たな天使』（前書き）

そらのおとしもの〜天使と仮面騎士の物語〜！

前回起こった3つの出来事！！

- 1つ、イカロスが刹那達の学校に（不正）転校してきた
- 2つ、人類至上主義集団のアロガンズが本格的に動き出した
- 3つ、工藤刹那がゲイザーに変身し、フォールスを倒した。

第4話『不死身のM/新たな天使』

【工藤家、刹那の自室・13:30】

昼食後、ベッドで昼寝していた刹那は目が覚めた。

「そろそろ起きるか」

刹那は背伸びしようとするが、体が動かず、引っかかりを感じた。

疑問に思った刹那がシーツをめくると、

「……もう起きるんですか」

何故かパジャマ姿のイカロスが刹那に抱きついて寝ていた。

「イ、イカロス、何故ここで寝ている？」

奇襲に取り乱しながらも刹那は尋ねる。

「愛し合う者同士は一緒に寝るものだとアインハルトさんが言っていました」

「あいつか…」

向こうにいる最後の夜天の主にいろいろと吹き込まれた古代ベルカの戦姫を思い浮かべ、刹那は頭を抱える。

「駄目でしたか…？」

「いや、むしろ嬉しいんだが…、寝ている最中に襲われるとか思わないのか？」

「大丈夫です…、あなたはひどいことをするような人じゃないと信じていますから」

静かだけれど、強い思いがこもった台詞を発しながらイカロスはより一層刹那に密着した。刹那は戸惑いながらも抱き返した。刹那にとってイカロスの感情や仕草の1つ1つが嬉しかった。

「そろそろ起きるぞ、イカロス」

「はい」

2人はベッドから降りて、私服に着替えた。

その時、イカロスが刹那の目の前でいきなり着替え出し、刹那がオ

バービートを起こして気絶しかけたのは別の話だ。

1階のリビングに入った時、刹那が見たのは、明るい空色のツインテールを持つ小柄な少女と

「はむはむ。これ、いけますね」

「喜んでいただけで嬉しいです」

トリュフチョコを食べている腰まで届く長い金髪の少女がリインと一緒にいるところだった。

「おはようございます、2人とも」

「リイン、この2人は誰だ？」

未確認の存在を警戒しながら刹那は質問した。その質問に、リインではなく小柄な少女が答えた。

「アンタが工藤刹那ね。私はニンフ、イカロスの幼馴染よ。で、その大食いは同じく幼馴染のアストレアよ」

「はむはむ。よろしくお願いしますね」

「アンタ、少しは周りのことを考えなさいよ」

ニンフはアストレアを慌てて制止する。

「ニンフ…、アストレア…、久しぶり」

「まあね」

「イカロスさんが元気そうで良かったです」

イカロスの挨拶にニンフとアストレアが元気よく返事する。

「個性的な友達だな、イカロス」

「ええ、クセはありますが、良い友達です」

刹那は笑みを浮かべて喋りながら空いてる席に座る。イカロスはその隣に座ろうとするが、ラインが電光石火の速さでその場所を占拠した。

「リイン、そこをどいて…」

「私はまだお兄ちゃんを諦めていません!!」

2人は睨みあい、両者の間で火花が散る。

「アンタ、イカロスだけじゃなくて妹にも手を出しているんだ」

「実の両親が死んで心細かったせいかもしれんが、リインは出会った頃からこんな感じだった」

「ふうん、光源氏計画でも企んでいたの？」

「断じて違う!!」

ニルフは睨みあいを続ける2人を好奇の視線でじっと見つめる。

「そんなに面白いか？」

「面白いわよ、いつドロドロした人間関係になるのかワクワクするじゃない」

「当事者の1人はお前の幼馴染なんだぞ」

「そんなこと、とっくの昔に知っているわ」

「ニンフさんは昼ドラが大好きですからねえ」

祭りでも楽しみにするかの様なニンフに刹那は突っ込みを入れ、アストレアは湯呑に入っている緑茶を飲みながら捕捉する。刹那がため息をついた時、携帯が鳴った。

「翔兄か……。もしも『フォルス』が出てきた！　すぐに来てくれ！
！』分かった」

敵襲の知らせに刹那は目つきを変えた。

「悪いが、これから出てくる」

「何かあったの？」

「説明は後だ！」

そう言うと、刹那は家を飛び出した。

【公民館前】

「くそっ！ 厄介だな」

左翔太郎とフィリップの精神体^{せいしんたい}が変身する、赤と銀に塗り分けられたライダー……仮面ライダーダブル・ヒートメタルは棍型の武器であるメタルシャフトを使い、複数のソルジャーフォールスを同時に翻弄^{ばんりやう}していた。

【この手ごたえ、さすがはテロリストだね。ミュージアムのマスクレイドよりもてれだ】

「感心している場合か!!」

フィリップは冷静に敵を分析する。その分析を証明するかのよう^{よう}に敵のリーダーが指示を出す。

「距離を取れ！ 遠距離戦に持ち込むんだ!!」

『了解!』

ソルジャーはダブルと距離を取り始め、剣と一体化しているマシンガン^{マシンガン}を撃ち始めた。ダブルは素早く近くの柱に身を隠した。

「銃には銃だ！」

ダブルは黄色のメモリと青いメモリを取り出し、バツクルに装填されている2本のメモリと交換する。

LUNA TRIGGER：LUNA・TRIGGER

電子音と共にダブルの色は金と青に変わった。

「はっ！」

フォームチェンジしたダブルはトリガーマグナムという名の銃を構え、柱から出て乱射した。放たれた弾丸は変幻自在に軌道を変え、次々とソルジャーを撃破していった。

「よし！」

【智樹の方はどうなっているかな…】

ダブルがそんなことを分かっていると、その背後に智樹が変身する龍騎が吹っ飛んできた。それを追うように甲羅とカタツムリの様な目を持つフォルスが現れた。

「いててて」

「おい、大丈夫か!？」

「はい、なんとか」

ダブルは龍騎に手を貸して立ち上がらせた。

「1日で仮面ライダーを2人始末できるとはな、こいつはラッキーだな」

フォルスは2人に攻撃するべく右腕を引きながら一気に距離を詰める。が、横から雨あられと降り注ぐ弾丸によってそれは阻止された。

【この弾丸は…】

「ようやく来たか」

ダブルと龍騎が弾丸が飛来してきた方向を見ると、搭載しているガトリングから煙が立ち上っているゲイズチェイサーで接近してくるゲイザーの姿があった。

「「刹那!」」

【遅刻だよ】

「悪い、遅くなった」

近くにバイクを停めて降りたゲイザーはライドブツカ ? をソードモードにして構えて一気に踏み込み、袈裟に斬る。

しかし、フォルスは左腕を盾にしてその攻撃を軽々と防いだ。

「なら、これで！」

ATTACK RIDE: SLASH

ゲイザーはカードを使って強化した斬撃を連続で放つが、たいしてダメージは与えられていない。

「ふん！」

フォルスは攻撃直後の隙を狙い、ゲイザーを殴り飛ばす。

「刹那！」

殴り飛ばされたゲイザーを龍騎が受け止め、ダブルもその横に並んで戦闘態勢を整える。

「（今の防御方法、どこかで見たことがあるな）智樹、助かったよ」
「気にするなよ」

ゲイザーは龍騎に礼を言う。

【あのフォルス、ジュエルドーパント並の防御力だね。おそらく普通の必殺技じゃ跳ね返される】

「おいおい、それじゃいったいどうやって奴を倒すんだ？」

フィリップが冷静に言い放った言葉は、一同に危機感をもたらせた。

「さすがに3対1はまずいな。今日はひとまず撤退するか」

「おい、待て！」

ダブルが敵の逃走を止めようとするが、フォルスは右手から大きな鉄塊をゲイザー達の足元に発射し、塵煙を発生させ、視界を覆う。

視界が晴れた時、フォルスは既にいなかった。

第4話『不死身のM/新たな天使』（後書き）

最近、感想がなくて寂しいです。

出来たら、直すべきところ、良い所、単純になになにが良かったでも良いので書いてくれると嬉しいです。

第5話『破碎の衝撃』

【工藤家リビング】

「で、結局その怪物を逃がしちゃったわけね、あんた達は」

「ああ」

「そつなるな」

戦闘から2時間後、翔太郎とフィリップは探偵事務所、照井竜は警察署で情報収集や被害の確認、刹那と智樹は工藤家で反省会と対策会議を行っていた。何かあった時は互いの携帯に連絡することになっている。

「あいつの装甲、やたらと硬いんだよ」

「おまけに必殺技も普通に効かない確率が高い。あの装甲をどうにかしないと」

「はいはい」

シリアスなムードの中、アストレアが手を挙げた。

「イカロスさんのアポロンを使って消し炭にしちゃえばいいと思います」

その発言にニンフは「何とんでもないことを言ってるんだ!」という顔をし、普段無表情なイカロスでさえわずかに動揺を見せた。

「アンタ、町中であれを使うつもり!？」

「だって、そんなに装甲が硬いならまとめて吹っ飛ばすしかないじゃないですか…」

「イカロス、そのアポロンって言うのは何だ？」

刹那はニンフとアストレアを放置し、イカロスにアポロンの説明を求め。

「アポロンは、元々私のお母さんが今は亡き伯母さんのために作ったあらゆる存在を封印し、破壊する凍魔剣」

凍魔剣という言葉に刹那とリインは反応するが、口には出さない。

「と対になる弓で、5割に満たない出力でも町1つは楽に滅ぼせる威力があります」

「それは、使えるわけねえよな」

智樹は頭の後ろで手を組みながら言う。一方、刹那は別のことを考えていた。

（まさか『あれ』作ったのはダイダロスさんなのか？それに今の台詞から考えると、俺とイカロスの関係は…）

「ねえ」

刹那が1人思考していると、ニンフがそれを中断させた。

「何だ？」

「装甲が邪魔なんでしょ。だったら、防御力を無視出来る攻撃をするなり、装甲を『分解』すればいいじゃない」

「そんな簡単に出来れば苦労しないっ」『いや、出来る！』刹那？

ニンフの発言で活路を見出した刹那は智樹の発言を中断させる。

「ライダーではないが、今ニンフが言ったことを出来る魔法がある」

「魔法？お前確か魔力は無かったよな」

「そうだ。だけど、ゲイザーに変身してアタックライドとしてそのカードを使えばいけるかもしれない」

刹那が喋り終わると携帯に着信が入ったので電話に出た。

「もしもし」

『刹那かい』

「フィリップか、何か分かったのか？」

『検索中に奴らが次に何処を狙うのかが分かった。敵の情報は現地で翔太郎に説明させるからすぐに向かって欲しい。場所は』

「分かった、すぐに行く」

電話を切ると、智樹の方を向いた。

「智樹、今すぐ出るぞ！奴らがまた攻撃を仕掛けてくるらしい」

「おいおい、休む暇もないのかよ」

「頑張ってください、お兄ちゃん、智樹さん」

祝福の風に見送られ、刹那と智樹は本日2度目の出陣を行うのだ
た。

【風都大通り】

「さあ、今度こそこの風都から魔族や神族を消し去ってくれるわ
！」

前回のカタツムリ似フォルスがそう言うが、彼らを出迎えたのは木
枯らしただけだった。

「誰もいませんね……」

随伴していたソルジャーの1体が呼び掛けるが、その他大勢は沈黙
していた。

「それにしても、いったい何故誰もいないんだ？」

「それは、お前達が攻めてくる前に警察に頼んで一般人を避難させ

「だからだ」

その沈黙を破るように刹那と翔太郎、智樹が現れた。

「今度は逃がさないぜ！変身！」

CYCLONE・JOKER

「変身！」

KAMEN RIDER：GATHER

「変身！」

変身を終えたダブルとゲイザー、龍騎は敵部隊に突っ込んでいった。

「そりゃあー！」

ダブルは風を纏った拳でソルジャーを殴り飛ばし、ハイキックで後ろにいるソルジャーを蹴り飛ばしたりした。

STRIKE VENT

龍騎は右手にドラグクロを付けてドラグクロ・ファイヤーで複数のソルジャーをあの世に送っていた。

「大半が翔兄達に引きつけられている今の内にリーダーを倒しておくか」

ゲイザーは2人の様子を見た後ライドブツカー？で敵に突貫し、カタツムリ似フォルスの下にたどり着いていた。

「何をするのか分からんが、どんな攻撃もこの体には効かんぞ！」

「それはどうかな？」

ゲイザーはライドブツカー？をガンモードにしてけん制しながら接近した。敵は体を硬化させてそれに耐えた。その間フォルスの動きは止まっていた。

「この時を待っていたー！」

「何？」

ATTACK RIDE: BREAK IMPULSE

ゲイザーは敵に考える間も与えずにカードを1枚取り出して使用し

た。その上で接近し、右腕を鷲掴みすると、硬化したフォルスの体にひびが入っていった。

「くそ！！」

フォルスはひびが内臓を脅かす前に素早く硬化した部分をパージし、ゲイザーから距離を取った。

「本来なら今ので完全消滅しているはずだが、さすがはスピード7……トリロバイトアンデッドをモデルに作られただけあってしぶといな。さしずめトリロバイトフォルスカ」

「何故それを知っている！？」

「情報収集に長けた仲間が調べてくれた」

とはいえフォルスも相当な痛手を負っているということに変わりはない。今ならその気になれば通常兵器でも倒せると思えるぐらいに装甲が無くなっている。

「チェックメイトだ」

R
FINAL ATTACK
RIDE:G・G・G・GATHERE

ゲイザーはライドブッカー？をソードモードで構え、目の前に10枚のダイヤモンドフィールドが展開される。

「このダメージじゃ受け止められない！逃げるか」

SPIDER

「な、何だこれは！？」

逃走しようとしたフォルスの動きをダブル・ルナトリガーが網を用いて封じる。

「逃がさないといったらう」

【後は任せたよ、刹那】

「ありがとう、2人共」

ゲイザーはダブルLTに礼を言うと、迷いなくダイヤモンドフィールドを走り抜けてフォルスにダイヤモンドスラッシュ？を決めて爆散させた。

その戦いを戦場からそう遠くないビルの上で見ている1人の少女がいた。イカロスの幼馴染の1人、ニンフである。

「風都に仮面ライダーと呼ばれる白い剣士が現れるってのは聞いてたけど、まさかそれが刹那とは思わなかったわ」

妖精を思わせる虹色の羽根を煌めかせているニンフの視線の先では、変身を解除した智樹が他の2人とハイタッチしている。

「7年前にダイダロスさんの所から盗まれたD2シリーズの片方をどうやって手に入れたのかは分からないけど、かなり使いこなしているみたいね。ま、イカロスの彼氏が装着者ならダイダロスさんも文句言わないでしょ」

ニンフは羽根を羽ばたかせてその場を去った。

「意外と面白そうだし、私もここに住もうかな？」

そう言うニンフの表情はまるで新しいおもちゃを見つけた子供の顔だった。

第6話 『嫉妬と蜂と医者』

風都公園のベンチで、刹那達と同じ制服を着用し、眼鏡をかけた1人の少年がどんよりと暗い嫉妬、憎しみなどの負のオーラを放出しながら座っていた。

「くそっ！！　なんであいつばかりあんなにモテるんだ！？　納得できない！！！」

少年……山田黒助は頭をかきむしりながら大声を上げた。

「女の子に告白しても、『私、お兄ちゃんが大好きなんです』なんてプラコン発言するし、その兄責はついこの間恋人を作るなんてどこのギャルゲーだよ！！??」

山田は思いつきり叫びながら立ち上がった。その山田に緑色のコートを着た1人の男性が近づいていった。

「な、なんだ、お前は？」

「その欲望、解放しろ」

男性は山田の額に出現した投入口にメダルを入れると、どこかへ消

えていった。

【風都商店街】

刹那とリインは夕飯の買い出しに来ていた。その両手には、いくつかの袋がかかげられていた。

「ふんふんふんふん」

「ずいぶんとご機嫌だな」

「イカロスさんが来てからお兄ちゃんと2人つきりでお出掛けなんでしょうね。ありがとうございます」

ちなみに、イカロスがいないのは、事前にリインとの間で行われたじゃんけんで負けたからである。町の人達は、上機嫌なリインと刹那が歩く姿を暖かい目で見守っている。

「まあ、たまには兄妹のコミュにケーションも必要　伏せるツ！
！」

寒気を感じた刹那はリインと共に地面に伏せる。それとすれ違うかのように突風が吹き、2人の目の前に蜂の様な怪人が降り立った。

「きゃああああああ！！！」

1人の女性が悲鳴を上げたのを皮切りに町の人達が我先にと逃げ出した。

「リイン、これを持って逃げろ」

「分かりましたです」

刹那はリインに自分が持っていた袋を渡し、ゲイザードライバーを腰に巻いた。

「変身」

K A M E N R I D E : G A T H E R

ゲイザーに変身した刹那はライドブッカー？をSモードにし、緊張感を保ちながら相手の様子をうかがった。

「クドウセツナ…、ナンデオマエガ……ユルセナイ……」

(こいつ、俺が目的なのか!? まさかアロガンスに正体がバレたのか?)

怪訝に思うゲイザーに八手型怪人が突っ込み、槍の様な突起物が装備されている左腕を突き出した。

「その程度の攻撃で……!!」

ゲイザーは八手型怪人の攻撃をライドブッカー?で難なくいなし、胴体に一閃を決める。怪人の傷口からは何故か銀色のメダルがこぼれ落ちた。

「こいつ、ドーパントやフォルスじゃないのか!？」

ゲイザーは未知の特徴を持つ敵に驚くが、決して動きを止めることはしない。戦場でポーツすることが死につながると知っているからである。

「そいつはな、ヤミーって言うんだよ」

ゲイザーの問いに答えたのは、ミルクタンクを担いで後ろからやってきた男性だった。鍛えられたたくましい体にラフな服装の男性は

工藤家にとって左翔太郎と同様に長い付き合いのある大切な人だ。

「久しぶりだな、刹那」

「伊達さん、何故こんなところに?」

「ちよいと仕事でな、そこにいるヤミーを倒しにきたんだよ」

そう言うと、伊達明^{だてあき}という名前の男性はミルクタンクを地面に置いて腰にベルトを巻き、左手で先ほどヤミーからこぼれ落ちたのと同じ銀色のメダルを持った。

「変身」

伊達は球体状バックルの左側に銀色のメダルを入れ、右側のダイヤルを回すと黒い装甲を身にまとい、仮面ライダーバースに変身した。

「伊達さんが仮面ライダー!?」

「はっ!」

伊達は八手型怪人のスズメバチヤミーにバースバスターで攻撃を始めた。

「聞きたいことはいろいろあるけど、こいつを倒すのが先だな」

ゲイザーはライドブツカー？で体勢が崩れたヤミーに斬りかかった。その後、バースが射撃でヤミーをひるませ、その隙を付いてゲイザーが近接攻撃を仕掛けた。また、ヤミーがバースを攻撃しようとするればゲイザーがすれ違い様に足払いをかけ、バースが距離を取って射撃する。2人の即席コンビネーションによってヤミーは体を構成するメダルを次々とはぎとられていった。

「なかなかやるな、刹那」

「伊達さんこそ本業が医者とは思えないですね」

バースがゲイザーと軽口を叩きながらスズメバチヤミーを撃とうとした時、黒と緑色が特徴的な虫型の怪人が殴りかかった。

「伊達さん!!」

「メダルの収集を邪魔させるか!!」

「くそつ、グリッドまで来ちゃったか。刹那、悪いけどこいつのお守り頼むわ」

「分かりました」

ゲイザーはライドブッカー？・Gモードで虫型グリードを牽制して
バースから引き離し、入れ換わるようにして交戦し始めた。

「ちょうどいい。ここでお前を殺れば、ヤミーの親が欲望で満たさ
れる」

虫型グリードがゲイザーに右腕の鎌で切りかかった。

「そう簡単に殺れると思うな！！」

ゲイザーは左腕で攻撃をいなしてライドブッカー？の銃口を突きつ
けるが、虫型グリードは空いている左腕で殴り飛ばし、ゲイザーの
腹部にも膝蹴りを決めた。

「なるほど、伊達さんが遠慮したがるわけだ」

「これでお前の武器はなくなったぞ！ 大人しく俺に殺される！！」

「だが、甘いな」

ゲイザーは右腕を上にかざし、ライドブッカー？を召喚した。

「何!？」

ATTACK RIDE: SLASH

ゲイザーは素早くライドブッカー?をSモードに変えて呆気に取られている虫型グリードを何度も斬りつける。

「くうっ、ここは一旦退くか」

虫型グリードは頭の角から雷撃を放ち、辺りに塵煙を発生させた。

「俺の名前はウヴァだ!! 次に会ったら必ず殺してやるから首を洗って待っている!!」

ウヴァは捨て台詞を残し、ヤミーと一緒に逃げていった。

「逃げ足は速いねえ」

バースとゲイザーはベルトを外して変身を解除した。

「積もる話があるからお前んちに寄っていい?」

「こつちもいろいろ聞きたいことがありますし、良いですよ」

「それじゃあ、警察が来る前にとつと行くとしますか」

2人はそそくさとその場から立ち去り、工藤家へと向かっていった。

第7話『紫槌と決着と未来』（前書き）

これまでの「それらのおとしもの〜天使と仮面騎士の物語〜」は

「クドウセツナ…、ナンデオマエガ…：ユルセナイ…：」

（こいつ、俺が目的なのか。！？ まさかアロガンスに正体がバレたのか？）

「こいつ、ドーパントやフォルスじゃないのか！？」

「そいつはな、ヤミーって言うんだよ」

「伊達さんが仮面ライダー！？」

第7話 『紫槌と決着と未来』

【工藤家】

商店街でウヴァやヤミーと一戦交えた後、リビングで伊達達との話し合いが行われていた。

「ヤミー……、それがあの怪人の名前ですね」

「そうだ」

「話を聞くに、ヤミーはお前を狙っていたみたいだな」

肯定した伊達に続くように喋ったのは、後藤慎太郎という男性である。

「憎しみのあまり殺されかけるって、アンタいったい何をしたのよ？」

「身に覚えがないな」

「リンちゃんにイカロスちゃんが可愛すぎてすぎて嫉妬したんじゃないの?」

「……すごくありえるわね」

たまたまいカロスに会いに来ていたニンフはイカロスとリインを見ながら伊達の言葉に頷く。

「すみません、刹那」

「お前が気に病むことじゃない」

シユンとなっているイカロスに刹那はフォローを入れる。

「せんせい医師の言うことが本当なら私達も狙われる可能性があるってことですよね？」

「そういうことになるな」

「翔ちゃんにも応援を頼んでお前達を護衛しながら犯人を探してみよ。刹那はともかくイカロスちゃんとリインちゃんはあまり荒事に慣れていないだろ」

「すみません、ついさっき会ったばかりなのにそこまでお世話になつてしまって……」

「良いってことよ」

申し訳なさそうにするイカロスに対し、伊達は笑顔で答える。

「せっかくですし、今日は夕飯を食べていってください。刹那がベヒーモスという獣を狩ってきたのでお肉は山ほど有るんです」

「待て！！ 今明らかに地球産じゃない名前が出てきたが、どこから狩ってきたんだ？」

イカロスが口に出した単語に反応した後藤が質問するが、刹那はさも当然と言うように

「イヴァリースで狩ってきました」

と口にした。

【翌日・風花高校】

「また怪人絡みでここに来るとは思わなかったぜ」

「速く調査を進めるぞ！ でないと、2人が危ない」

「分かってるって」

2人は目についた女子や男子、教員などに話を聞いていった。1時間ぐらい調査を進めていった後、1年生の教室が多く集中しているエリアでようやく手がかりをつかめた。

「男子の様子がおかしい？」

「詳しく話を聞かせろ」

「はい、ついこの間に同じクラスの山田黒助っていう男子が別のクラスにいる女の子に告白したんですけど、玉砕したんです」

「それで」

「それからこの世が終わったかのような表情をしていたんですけど、今朝工藤先輩の話をしてから急に怖い顔になったんです」

「なんか展開が読めてきたが、その告白された女の子の名前は分かるか？」

「工藤リインフォースさんです」

それを聞いて翔太郎は「やっぱりか」と頭を抱えていたが、照井の方は頭の上にハテナマークを出していた。

「どういことだ、左？」

「昔からリインに告白する奴は結構いたんだよ。結果は言つまでもないが……」

「なるほどな。で、そいつは今どこにいる？」

翔太郎の話を聞いた照井が話の続きを促した。

「授業が終わったら、すぐに教室を出ていきました」

「ッ！？ 刹那が危ない！！」

翔太郎がそう言った瞬間に校舎の一部が破壊され、悲鳴が聞こえてきた。

「まさか犯人がこの学校の生徒だったとはな」

教室にいた刹那は嫉妬のオーラをみにまとった山田がやってきた後にヤミーの出現を確認し、現在は1階を逃走中である。

「確か今の時間は体育館が空いていたな。そこなら人的被害が出ないはずだ」

刹那は体育館に進路を向け、全力疾走した。

「刹那！！」

途中、十字路から伊達が合流した。

「イカロスちゃんは後藤ちゃん、リインちゃんは翔ちゃん達が守ってくれているから安心しろ！　それで、これからどうする！？」

「体育館で敵を迎撃します！！」

「了解した」

2人は一般人に接触しないよう気を付けながら全力で走り続け、数分後に体育館の中へと入った。敵に備え、2人はそれぞれドライバ―を腰に巻いた。

「「変身」」

K A M E N R I D E : G A T H E R

2人が変身完了すると同時にスズメバチヤミーが体育館の窓を突き破ってきた。

「クドウセツナ……オマエヲコロス……」

ヤミーは左腕を構え、上空から加速をつけながらゲイザーめがけて突っ込んだ。

「自分を変えようともせず、わめくことしか出来ない奴に文句を言う資格はない!!」

ゲイザーはなんなく攻撃を回避した。勢い余ったヤミーはブレーキをかけることが出来ず、腕を床に突っ込んでしまっただけで抜けなくなってしまった。バースとゲイザーはその光景を見て目が点になった。

「「……………」」

k A M E N R I D E : K I V A

F O M E R I D E : K I V A D O G G A

ゲイザーは吸血鬼をモチーフとした仮面ライダーキバ・ドツガフォームに変身し、ドツガハンマーを思いっきり振り上げてヤミーに叩きつけた。それにより、ヤミーの全身が深く埋まっていくと同時にセルメダルが辺りに散らばった。

「…………セルメダル拾うか」

やる事が無くなったバースはセルメダル収拾に集中し、Gキバ・ドツガは黙々とハンマーを振り上げては叩きつけるを繰り返した。そして、ヤミーに止めを刺そうとした時、

「やめろおおおおおおお！！！」

かなり切羽詰まった表情でウヴァがGキバ・ドツガを突き飛ばした。

「お前、仮にも正義の味方がやることじゃないだろ！！！」

Gキバ・ドツガはゲイザーに戻ってウヴァに近づきながら1枚のカードをドライバーに装填し、

FINAL ATTACK RIDE:

「お前らグリードにだけは」

右手でサイドハンドルを押した。

T・T・T・THEBEE

「言われたくないわあああ!!」

ゲイザーは槍状に形成されたエネルギーをまとった左腕でウヴァの胸部を貫いた。

「がはっ!!」

ゲイザーが左腕を引き抜くとウヴァはよろよろと左手で胸をかばいながら距離を取った。

「こっとなったらセルメダルだけでも」

ウヴァが後ろを振り向くと、大量のセルメダルとバースの姿があり、ヤミーの姿はどこにもなかった。

「残念、ヤミーは俺が解体しちゃった」

バースは茶目つ気を出しながら言った。

「くっ！ 覚えてろ、貴様ら！！」

ウヴァは捨て台詞を吐きながら去っていった。

「なんか締まりの悪い終わりだったな……」

「まあ、いいじゃん。結果オーライって事で」

こうして、工藤剎那殺害事件は未遂に終わった。

第7話『紫槌と決着と未来』（後書き）

後半がこんな展開になるとは、自分でも予想外でした。

たまには、こつこつ話も良いですよ。

第8話 『Dを捕まえる／奪われたクリュサオル』

「私のクリュサオルがな〜い!!」

アロガンスの襲撃もなく、刹那たちが工藤家で平和に過ごしていると、アストレアが叫んだ。

「うっ、さっきまではちゃんと有ったのに」

「もう、またどこかで落としたの?」

落ち込むアストレアにニンフが近づく。

「イカロス、クリュサオルというのはなんだ?」

「アストレアが持つ超振動光子剣のことで、分かりやすく言えばビームサーベルみたいなものです」

「そんな物騒な物を落としたんですか!?!」

刹那の質問に対するイカロスの答えにリインは驚愕した。ニンフとアストレアがアーだこーだと話していた。

「もう1度よく探してみなさい。そういう時は、あんがいポケットの中にあるから」

「さっきからずっと探しているんですけど……あっ!?!」

「……見つかったの?」

様子を見ていたイカロスがアストレアに尋ねる。

「クリュサオルは無かったんですけど、代わりにこれがありました」

アストレアが手に持っていたのは、青いバーコードのような模様が描かれたカードだ。そこには、「お宝は頂いたよ」と1文添えられていた。

「これ、ものすごく見覚えがありますね」

「というより、こんなことをするやつを人しか俺は知らない」

「心当たりがあるんですか!?!」

アストレアが刹那に思いつきり顔を近づけ、涙目で聞く。

「顔が近いぞ」

「で、犯人h」

アストレアの発言は、彼女に向けられたリインのフリジットダガー（1本）とイカロスの銃で遮られた。

「良い度胸ね、アストレア。命が惜しくないのかしら？」

「少し……頭を冷やしましょうか」

今にも死刑が執行されそうになっているアストレアを放置し、刹那はフィリップに電話をかけた。

『どうしたんだい、刹那？』

「少し探してほしいことがあるんだ。キーワードは」

【町はずれの工場】

「今日は、またコレクションが増えたね」

1人の青年が右手で待機状態のクリュサオルを投げて遊びながら言った。

「さてと、次の世界に行くとするか」

ATTACK RIDE:MAGNET

電子音が聞こえた瞬間クリュサオルは何かにつ張られていった。青年がクリュサオルの飛んでいった方向を見ると、クリュサオルをキャッチした仮面ライダーゲイザーと仮面ライダーダブルCJがいた。

「クリュサオルは返してもらった」

【見事な手際だね、刹那】

「後は、このこそ泥を叩きのめすだけだな」

「武器に使われている技術からうすうす感じていたんだけど、やはり彼女は君の関係者だったのか」

青年……海東大樹はやれやれといった感じでディエンドライバーを構えた。

「変身」

KAMEN RIDER: DIE-END

大樹はディエンドに変身し、ゲイザー達に銃を向けた。

「せつかく手に入れたお宝なんだ。返してもらおうよ」

「ふざけるな！　なんだ、そのジャイアニズムは！？」

【落ち着きたまえ、翔太郎】

「フィリップの言う通りだよ、翔兄。それに、策は既に講じてあるから心配しなくていいよ」

「いったいどんな策なんだ？」

ダブルCJがゲイザーに質問する。

「それは、見てのお楽しみだ」

「なら、その策が出される前に片をつけるか」

KAMEN RIDER: OOO GATAKIRIBA

デイエンドはドライバーにカードを装填し、オーズ・ガタキリバを召喚した。

「たった1体呼び出しただけで何が出来る？」

「翔兄、それ死亡フラグ」

2人が話している間に召喚されたオーズ・ガタキリバは特殊能力で分身し、その数が50体が増えた。

「な、なんじゃ、こりゃあ!？」

【これだけの分身を作り出せるライダー、実に興味深いね】

「さあ、どうする？」

デイエンドは不敵な笑みを浮かべていたが、その瞬間負のオーラを身にまとうなにものか 優しいオレンジのセミロングとチャイナドレスを想わせる服装 に両肩を掴まれた。

「大樹さん……何をしているんですか……」

「お宝探し探しさ。というより、何故君はこんな所にいるんだい？」

「刹那に頼まれたんです……どこぞの女に手を出している馬鹿を止めるのを手伝ってくれって……」

突然の乱入者に付いていけないダブルC」はゲイザーに尋ねた。

「あの子、誰？」

「土樹と付き合っているアインハルトと同じく古代ベルカの王族の1人である冥府の炎王イクスヴェリアだ。先日、プールで大樹さんに告白したらしい」

【なるほど、ニンフ好みの昼ドラを繰り広げるつもりなんだね？】

「結果的にそうなる可能性もあるな」

一方、ディエンドはイクスに問い詰められていた。

「で、あなたは私という者が有りながらいったい何をしていたんですか？」

「彼女のお宝を奪ったのさ」
クリュサオル

「ふうん、女性の大切な物を奪ったんですね……」
処女

「なんか逃げた方が良い気がするね」

ディエンドはイクスの両手を振りほどこうとするが、振りほどけな

かった。あえて言うが、イクスは生身であり、身体強化の類はいいさに行っていない。

「向こうでちょっとOHANASHIしましょうか」

「待ちたまえ！　まだお宝の回収が」

イクスは問答無用でディエンドドライバーを取り上げてディエンドの変身を強制解除させる。それにより、オーズも消滅する。

「さあ、逝きましょう」

海東大樹はイクスに連れ去られていった。その後、彼がどうなったかは想像に難くない。

「影が人をさらっている？」

「ああ、そうだ」

「翔太郎、これってもしかして？」

「ああ、ドーパントにフォルスに違いねえ」

ある日、風都のライダー達が掴んだ奇妙な事件の話

だが、これが傲慢なる者達が秘密裏に進めていた計画に関わるきっかけになるとは、この時誰もが想像していなかった

いつもと同じようにただ怪人が何かしでかしたとしか4人は思っていないかったのだ

その調査を進めていた探偵と少年は偶然にも男性が黒くよどんだ闇に取り込まれそうになっている現場に遭遇する

「た、助けてくれえ！！」

「待ってる！！ 今助けてやる！！」

罪なき人を救おうと2人は必死に手を伸ばしたが、助けることは

出来なかった

その2人の近くに闇を象徴するかのような黒い怪人が現れた

「これはこれは、仮面ライダー達ではありませんか」

「誰だ、お前は!？」

「私はアロガンスに所属するダークネス……影を統べる者です」

黒木暴力は恭しく紳士の礼をする

「申し訳ありませんが、まだ貴方達を迎える準備は整っていません。ですので、失礼させていただきます」

傲慢なる暴力は自身の足元に闇を発生させ、その中に沈んでいく

「おい、待て!！」

「逃がすか!！」

少年と探偵は追いかけるが、黒き暴力を捕えることはできなかつた

しかし、少年だけは闇の中に飛び込み、生者が決して訪れることが出来ないはずの世界へとたどり着いた

「ようこそ、死後の世界へ」

そこは、未練を残した少年少女が暮らす世界

「そんな……なんで父さんと母さんが……」

出会ったのは、かつて死んだはずの両親

「たとえどんなに辛い未来が待っていたとしても戦い続ける……！
それが、仮面ライダーだ……！」

今ここに少年の出生と力が明かされる

劇場版仮面ライダーゲイザー〜受け継がれし天使と悪魔の力〜

2011年、放送予定

【????】

ダークネスフォルスを追いかけ、闇の中に飛び込んだ刹那は曇り空に包まれた学校のグラウンドらしき場所にたどり着いた。

「ここはいつたい？ それにこの学ランは……土さんが世界を移動する度に起こるっていう職業変換システムか」

身に覚えのない学ランを着ていることを確認した後、状況確認のために周りを見渡す。

「人を探すか……敵の勢力圏内である可能性があるから気をつけなければいけないが」

そう言った刹那は辺りを警戒しながら校舎に入っていった。

「学校で人がいるとなれば基本は職員室だな」

校舎の中を歩いていた刹那は誰かが接近してくる音を聞き、ライドブッカー？をGモードで構えて十字路の陰に身を潜めた。接近して

くる足音の主は声を発さず、銃に弾を込めた。

(来る!!)

足音が十字路まで近づいてきた瞬間に刹那は陰から飛び出して足音が聞こえてきた方向へとライドブッカー?を向けた。同時に、足音の主……紫の髪と緑の瞳を持ち、セーラー服を着た少女もまたハン ドガンを刹那に向けた。

「ずいぶんと物騒な物を持っているじゃない。あなた、神の関係者かしら?」

「残念だが、そんな御大層な身分ではない。お前こそアロガンスの構成員じゃないのか?」

「そんな名前聞いたこともないわ」

2人はしばらくお互いの目を見つめあい、敵ではないと判断して銃を降ろした。

「私の名前はゆり。いちおうここ天上学園の生徒よ」

「俺は工藤刹那だ。ある事件を追っていたら偶然ここにたどり着いた。この場所について話を聞かせてくれないか?」

「良いわ、食堂で何か食べながら話しましょう。こっちへついてきて」
刹那はゆりについて食堂へと向かった。

【天上学園・食堂】

「未練を残して死んだ者達が暮らす世界か」

刹那はステーキ丼を食べながら話を聞いていた。

「そう、私達は死んだ世界戦線を結成して生徒会長である天使と戦っているの。今は、何故か休戦状態だけれどね」

「天使か……」

「どうかしたの？」

工藤刹那が知る限り、そのカテゴリーに該当する人物は4人だけだった。現在、押しかけ妻の如く工藤家の炊事を取り仕切っている恋人のイカロス（その母親は直接会ったことが無いので省く）とその幼馴染2人と後1人だけいる。

「いや、天使と言うのはまさに俺の母さんのためにあるような言葉だと思っただけだ」

そう、彼の母親である。

「ふうん」

「俺が小さい頃に死んでしまったが、母さんは強く、可憐で、不器用だけれど優しい人だった」

「良い人だったのね……」

悲しそうな表情で語る刹那の話をゆりは何も尋ねずに静かに優しい笑顔で聞いていた。

「あなたのお母さん、名前はなんていうの？」

「母さんの名前は工藤か『ゆり、ここにいたのか』」

刹那は台詞を遮るように現れた2人を見て声を失った。

「音無君！ 天使も一緒なんだ」

『ゆりっぺさん、大丈夫ですか?』

「今食堂よ。いったい何があったの?」

戦線のオペレーターである遊佐からの通信がゆりの無線機に入る。

『現在黒い影の様な存在とグラウンドにて交戦中です。至急、向かってください』

「分かったわ」

通信が切れたことを確認したゆりは刹那を見つめた。

「話の途中で悪いんだけど、ちょっと手を貸してくれるかしら、刹那?」

「別にかまわない。俺は影を追ってここまで来たわけだしな」

刹那が右腕を上げると、ゲイズチェイサが食堂を破壊しながら突っ込んで来た。

「バ、バイクが勝手に!?!」

「校内でバイクを使うのは校則違反よ」

「今は非常事態よ！ 少しは大目にみなさい！！」

音無は驚くが、奏は平然と注意し、ゆりが声を上げる。

「それ、無理して乗っても3人が限界だろ。いったいどうするんだ？」

「じじする」

刹那はゲイズチェイサーに乗ってタンク上にある溝にカードを1枚差し込んだ。

ATTACK RIDE : SIDE BASSHAR

電子音と共にゲイズチェイサーはスマートブレイン製のサイドカー……サイドバッシャーへと姿を変えた。

「へえ、なかなか面白いバイクを持っているじゃない」

ゆりはサイドカーに乗り、奏がその後ろに割り込む。

「ちょっと!! なんてあんたまで乗るの!?!」

「事態を収拾するのは生徒会長の役目だから……」

「父さんは俺の後ろに乗って」

「分かった」

音無は事態の緊急性を考え、刹那が父さんと呼んだことには何も言わず、Gサイドバツシャーの座席の後ろに乗って刹那につかまる。

「行くぞ!?!」

刹那はGサイドバツシャーを目的地に向けて発進させた。テーブルや椅子、その他もろもろの設備が吹っ飛んでいくが、気にしていられない。仮面ライダー史上最強のモンスターマシンと噂されることもあるほどの馬力を持つそれは4人も乗せながら2分ほどでグラウンドが見えた。下を見ると、銃を使って『影』と戦っている者が多くいたが、中には刃物を使っている者もいた。

「なんて数だ!?!」

「一気に駆け下りる! しっかりつかまってる!?!」

刹那はGサイドバツシャーを左斜めに傾け、一気に坂を駆け下りて『影』を何体か吹き飛ばしてブレーキをかけた。バイクが止まった事を確認した4人は下車してそれぞれ戦闘態勢に入った。

「ゆりっぺ！」

「音無さん、来てくれたんですね!!」

「一緒にいるのは、天使と……誰だ？」

「俺か？」

刹那は戦線メンバーを見据えながらゲイザードライバーを装着し、変身カードを右手で持つ。

「俺は破壊を受け継ぐ仮面ライダーだ!!」

K A M E N R I D E : G A T H E R

大勢の敵味方がいる中で少年は仮面と鎧を身にまとい、仮面ライダーに変身し、ライドブツカー?をSモードで構え、敵に突っ込んだ。

昔、ある星に人々には知られていない天使の国があり、そこに最強と名高い少女がいました。

その少女は見た目は可憐で華奢ですが、並の兵士を圧倒する体術と剣術がありました。

その頃、特に大きな争いがあるわけでもなく天使の国は平和でした。

しかし、その平和は長くは続かなかったのです。

天使の存在と力を知り、その存在を危ぶんだ人間達はその身を人な悪魔らざる存在へと作り変える禁断の秘法を使い、天使達を殲滅しようとしてました。

少女達はほかの天使達と共に悪魔の如き所業を行う人間達から国を守るべく剣を手に取り、幾多の戦場を駆けました。

その戦いはとても激しく、多くの人達が散っていきました。

そこで、少女は現状に苦しみながらももがいている1人の心優しい

青年剣士と出会いました。

青年は人間達の中でも剣に優れており、少女を技と速さの剣士とするなら青年は力の剣士でした。

高い戦闘力を持つ2人の戦いは並の兵士では視認することも難しいほどのレベルでした。

2人は己の全てをぶつけて戦っている内に互いを理解し、愛し合うようになっていきました。

2人が自らの立場と恋心の狭間で苦しんでいる間に人間達の軍が天使達の一部を虐殺しました。

それに反発した青年は軍を離反し、撤退する天使達を守るべく果敢に戦い、少女も青年を支えるべく戦列に加わりました。

その甲斐あって天使達は無事に帰ることが出来ましたが、少女は帰れなくなり、青年と暮らすことにしました。

その後、青年と少女は1人の男の子を授かりました。

【天上学園・戦線本部】

「というのが、本人達が聞かせてくれた父さんと母さんのなれそめだ」

刹那達の加勢によって勢いを増した死んだ世界戦線は影を一掃した後、話をしていた。

「あの音無が悪魔か……想像できねえな」

「そうだよねえ」

「神族や魔族との交流があるってのもあまり実感が沸かないな」

青髪の日向に普通としか言いようがない大山、大男の松下が漏らす。

「本題の影についてですが、あなたが提供してくれた資料によると現世で少なくとも数回は現れているらしいですね」

「しかも、その影が人間を誘拐していて更に親玉がいるみたいね」

「マジか!?!」

「残念ながらもう一つ悪い知らせがある。俺は親玉を追ってここにやってきた。つまり、この世界に親玉がいる可能性はかなり高い」

「おいおい、それは不味いんじゃないのか？」

メガネの高松に補足するようにゆりが喋り、日向が驚く中、刹那が告げた事にヤクザっぽい藤巻を始めとした戦線メンバーに動揺が走る。

「はっ！ 昨日今日現れた奴の言うことなんか信用『ゆり、他に話すことはないか？』無視すんなあああああ！！」

黒っぽい髪の野田がハルバードで刹那に斬りかかる。

「ガードスキル：ディレイ」

刹那は高速移動で野田の斬撃をかわして後ろに回り込み、ライドブツカー？の刃を首に突きつけた。

「なっ！？」

野田はある人物しか使えないはずの力を刹那が行使したことに驚愕

した。

「今のは!？」

「天使と同じガードスキル!!」

日向と大山が目を見開いて刹那を見る。

「2人とも、武器を納めて」

ゆりの言葉に従い、2人は武器を納めて距離を取った。

「今後は、影への対処を優先とし、必ず複数で行動することを義務付ける。会議は、これで終わりよ」

ゆりの一声により戦線のメンバーは次々と本部を出ていった。そんな中、音無は刹那に近づいていった。

「お前、まだここに来たばかりだろ。俺が案内してやるよ」

「分かった」

音無はそう言って刹那の手を掴んで本部を出ていった。

「まずは、寮の部屋を確認するぞ。部屋の番号は分かるか？」

「ちょっと待って 305だ」

刹那が学ランの胸ポケットにいつの間にか入っていた紙に書かれた数字を読む。

「ってことは、俺と相部屋か。よろしく頼むな」

「分かったよ、父さん」

「まずは、校庭の花壇に行くぞ」

「校庭………いつたい何故？」

初めに案内する場所がなぜ校庭なのかと刹那は頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「それは、見てのお楽しみだ」

音無は何かを企んでいる顔で刹那を校庭へと連れて行った。

【校庭】

「なるほど、これが理由か」

「そういうことだ」

校庭に着いた刹那の視線の先には麦わら帽子を被って草むしりをしている立華奏がいた。

「おーい、奏」

「結弦、それに刹那……」

「案内ついでにお前に会いに来たんだ」

「そうなの……。でも、まだ花壇の世話が残っているから……」

「せっかくだから俺も手伝うよ。ゆりっぺには複数で行動しろと言われてるしな」

刹那は奏とは別の花壇に行き、しゃがんで草むしりをする。

「仕方ないな」

音無も刹那の近くに寄って草むしりをする。しばらくの間草むしりをしていると、音無が刹那に聞いた。

「刹那、1つだけ聞いて良いか？」

「何？」

「来世で俺達はどうしている？」

音無の質問に刹那の手が一瞬止まったが、また動かし始めた。

「……神様つてのは残酷だよ……普通に暮らしていたのにいとも簡単にその幸せを踏みにじっていくのだから……」

「そうか」

刹那が沈痛な面持ちで答えたことから来世であまりよくない事態が起こったことを感じ取った。

「悪かったな、余計な事を聞いてしまって」

「なぜ謝るの？ 普通は慌てふためく場面だと思うんだけど」

「来世とはいえ自分の息子の前でみつともないところをみせられるかよ」

(どこに行っても父さんは父さんと言いつことが……普段は母さんを取り合っていたけど、いざという時は頼りになったな……)

刹那がしみじみしていると、奏が無言で刹那に近寄り、頭をなでた。

「母さん……」

「辛くなったら私達を頼って……あなたはすぐに帰るかもしれないけど、ここにいる間は助けてあげられるから……」

そういうと、奏は刹那から離れてまた花壇の草むしりを始めた。

「あいつもやっぱりお前のことを気にしているんだよ」

「そうみたいだな」

「さて、草むしりの続きをするぞ」

(なんか忘れている様な……まあ、いいか)

刹那は校舎案内のことをすっかり忘れ、奏に撫でてもらった時の感触を思い出しながら草むしりを続けた。

仮面ライダーゲイザー 受け継がれし天使と悪魔の力 EPIISODE 3

校庭で刹那は木刀を持ち、小さめの木刀を逆手で持つ1人の少女と向き合っていた。戦線に所属する椎名という古風な少女だ。緊張感がはりつめる中、木枯らしを合図に2人は踏み込んだ。

剣を打つ音が響き渡ってつばぜり合いになるが、不利を悟った椎名が刹那の斬撃の勢いを利用して後ろに下がり、再度攻撃を仕掛ける。刹那は木刀を持ち直し、それを弾く。椎名はすぐに木刀を拾おうとするが、音無が近づいてきたので試合はいったん中止になった。

「おお、やってるな」

「父さん」

「新入り……」

「試合はほとんど見ていないんだが、椎名の動きにちゃんとついていけるみたいだな」

「小さい頃、父さんと母さんが鍛えてくれたから」

「奏はともかく来世の俺がそんなに強いっていうのはまだ信じられないな。後、鍛練するのもいいが、少しは休憩しろ。あまり根を詰めると体に毒だからな」

そう言って、音無は刹那と椎名にスポーツドリンクが入ったボトル

を投げ渡す。

「ありがとう、父さん」

刹那がスポーツドリンクに口をつけようとした時、刹那と同じ学ランに帽子を着用した少年が突然現れた。

「ちよつと待ったあああああ！！！」

ぜえぜえと肩で息をする少年……直井文人は刹那を指さした。

「どこの馬の骨かも分からない貴様がこの僕を差し置いて音無さんと触れ合おうなど100年速い！！！」

「いや、親子なんだけど……」

「なら、生徒会長でもいいはずだ！！音無さんにはかり付きまとななくてもいいだろ！！こうなったら僕の催」

刹那を見ている直井の両目が赤くなるが、直感で危機を感じた刹那の投げた木刀がその額に直撃して沈黙した。

「容赦ないなあ」

「邪眼を使う敵には注意しろって……父さんが」

「俺が原因か！……！」

「浅はかなり……！」

刹那が直井を放置し、スポーツドリンクを飲んでいたら無線機に通信が入った。

『戦線関係者に通達。グラウンドに武装した謎の人型生物が出現。各員は直ちに集まってください』

「人型生物？ 影じゃないのか！？」

「とにかく行こう。そうすれば何が起きているか分かる」

「そつだな……！」

3人は校庭からグラウンドへと全力疾走した……倒れている直井を放置して。

「こつちだ……！」

3人の中で最も速い椎名が先導する形でグラウンドへと急いだ。

【グラウンド】

「ゆり！」

刹那達はグラウンドに着くと、隊列を組んでいる死んだ世界戦線の真ん中にあるゆりに近づいた。

「状況は？」

「見ての通りよ」

ゆりが指し示す方向を見ると、テロリストの雑兵として動いている戦闘員がいた。だが、普段とは違い、明らかに生気がない状態でふらふらしていた。

「まるでゾンビだぜ」

近くにいた日向がそう言うが、まさにその通りだった。

「あれが、あなたの言っていた悪魔の軍勢。普段からあんな感じなの？」

「いや、あんな状態の奴らを見るのは初めてだ。死者を復活させているかなんらかの手段でNPCを操り人形にしていると考えるべきだろうな」

「そう」

刹那の答えにゆりは簡単に反応を返した。それまでふらふらしていたソルジャーフォルスはふと戦線を見ると武器を手に突撃してきた。

「各員攻撃開始」

ゆりの号令で戦線メンバーは次々と発砲していった。刹那も敵の接近に備えてドライバーを装着した。

「変身」

《KAMEN RIDE：GATHER》

複数のシルエツトが重なると共に白金の騎士へと姿を変えた刹那は続けてもう一枚カードを使用した。

ゲイザーは左手にカイザブレイガンを召喚し、右手にライドブツカ
ー?・Sモードを構えて敵に突っ込んだ。ゲイザーはクロスアタッ
クで1体を切り伏せ、背後で味方ごとマシンガンで撃とうとしてい
た2体目をカイザブレイガンで撃ち抜く。ゲイザーはその動きに違
和感を感じた。

(どういうことだ!? いくらアロガンスでも今まで味方ごと撃と
うとすることなんて無かった。まるで敵を倒すことしか頭にない戦
闘マシーンだ)

ゲイザーは思考の間も動きを止めずに遠くで戦線メンバーを殺そう
としたソルジャーをカイザブレイガンで撃ちながら淀みのない動き
で正面にいる1体をライドブツカー?で斬った。続けて斬りかかっ
てきたソルジャーの剣をブレイガンで受け止め、ライドブツカー?
の刺突で腹部を貫く。

「く、来るなああああああ!!!」

戦線メンバーによる掃射を受けながらも前進しているソルジャーが
いたため、両手の武器による一斉射で倒し、戦線メンバーに駆け寄
る。

「大丈夫か!？」

「ああ、助かったよ」

「刹那!！」

「お前ら、無事か!？」

音無と日向が辺りの敵を掃討しながら近づいてきた。

「何なんだよ、こいつらは!？ 痛覚つてもんが無いのかよ!？」

「このままじゃキリがない!! こっちの弾薬が無くなるぞ!！」

刹那達と背中を合わせながら音無達がしゃべる。

「ダークネスが関係しているならば相手の属性はおそらく闇……。
なら、これだ!！」

ゲイザーはライドブッカー?から1枚カードを取り出し、ドライブバ
ーに装填した。

《KAMEN RIDE・TODOROKI》

現地では鬼と呼ばれる緑色の姿になったG轟鬼は更にもう1枚のカードを使用する。

《FINAL ATTACK RIDE:T・T・T・TODOR
OKI》

G轟鬼はエレキギター型の武器である「音撃弦おんげきげん 烈雷れつらい」を地面に突き刺し、必殺技である「音撃斬おんげきざん 雷電激震らいでんげきしん」を発動して清めの音を流し込む。対多数用に拡散されたそれはソルジャーフォルス達を浄化していった。

「やった………のか？」

敵が存在しないことを確認した戦線メンバーが武器を下ろしていく。

「やるじゃないか、刹那」

「ったく、そんな技があるならさっさと出せよ」

音無と日向がG轟鬼の肩を叩くが、当の本人は何の反応も示さない。

(確かに敵の姿は見えない。だが、この殺気は何だ?)

G轟鬼がキョロキョロしているのを見て日向がもう一度控え目に声をかける。

「あの〜、刹那。聞こえてるか？」

「ッ！！ 危ない！！」

G轟鬼は突然2人を突き飛ばし、その背中に紫色のエネルギー弾が直撃し、許容量を越えるダメージを受けたせいで変身が解けてしまった。

「刹那、大丈夫か！？」

音無が刹那の体を揺するが、うんともすんとも言わない。

「これはこれは……皆さんお揃いで」

声を聞いた音無達が校舎とは反対側の階段を見ると闇を象徴するかのようになつ黒な怪人 ダークネスフォルス が姿を現した。事前に刹那から話を聞いていた音無達はその正体に予想がついた。

「お前か？ 影を操っている奴は」

「いかにも」

「いったい何が目的でこの世界にやってきた!？」

日向がダークネスフォルスに質問する。

「目には目を、歯には歯を。闇をもって闇を討つためです。では」

ダークネスフォルスはそれだけ言うと立ち去ろうとする。

「待て!!」

戦線に所属する3人はダークネスフォルスに銃を向ける。

「無駄ですよ、その程度の火力で私を倒すことは出来ません。それに、仮面ライダーも今ごろ暗闇の中をさまざましている頃でしょうし、簡単には目を覚まさないでしょう」

ダークネスフォルスはさわやかに言い放つ。

「私達を忘れてもらっちゃこまるわ」

ゆりの命令で隊列を組んだ戦線は半円状にダークネスを囲む。倒れた刹那は戦線によって担架で素早く回収された。

「すみませんが、私は忙しいので失礼します」

戦線の存在を意にも介さないようにダークネスフォルスは自身の足元に闇を発生させ、その中に沈んでいった。それを確認したゆりは通信機を使つて指示を飛ばした。

「負傷者の確認と回収を行つてちょうだい！！ 高松君はギルドに武器の製造を急ピッチで進めるよう手配して！ 竹山君は敵の情報を集めて！！」

そう言い切つたゆりは拳を握りしめた。

（歯牙にもかかけられなかった。あいつにとって私達は虫けら以下と
いうことなの？ ふざけんじやないわよ！！）

ゆりは空を見上げる。それは、神への反逆を志す戦士の顔だった。

（次会つた時はドギツイのをぶちかましてやるんだから！！）

仮面ライダーゲイザー〜受け継がれし天使と悪魔の力〜 EPISODE 4

【天上学園・戦線本部】

「ゆりっぺさん、ギルドの最深部に多数の反応が確認出来ました。おそらくそこが敵の本拠地かと思われます」

竹山の報告を聞き、その場にいた戦線メンバーのほとんどがため息をついた。

「またギルドかよ。いったい何回あそこに行けば済むんだあ？」

「音無君が来てからでも……爆破の時に、天使のハーモニクスの時だからこれで3回目だね」

日向はうなだれ、大山は指を折ってその問いに答える。

「竹山君、工藤君の容態はどうなの？」

「敵から受けたエネルギー弾に強力な毒のような成分が含まれているせいか体が非常に衰弱しています。生きているだけでも奇跡ですね。後、僕のことにはクライ」

「となると、あの黒い奴とまともに戦える人がいないわね。あのべ

ルト、刹那以外は基本的に受け付けないみたいだし」

「そうなの!？」

いつも通り竹山の台詞を遮ったゆりが言ったことに大山は驚く。

「ええ、どうも防犯システムの一種らしいわ。あれの元となったベルトでいろいろトラブルがあったのを反省したようね」

「で、どうするんだ、ゆりっぺ？」

刀を携えている藤巻が尋ねる。

「音無君、あなたが代わりにあのベルトを使いなさい」

「ちよつと待て!! 今あいつ以外には使えないって言ったばかりだろ!!」

「本人の承認が非常事態の下ではある程度融通がきくみたいよ。それに、これは刹那を看病している天使の推薦でもあるのよ」

「奏の!？」

音無は疑問に思った。来世はともかく今の自分はそんなに強くない。なのに何故……? その疑念が頭をよぎらずにはいられなかった。

「天使曰く刹那にとってあなたは母親よりもヒーローなんだってさ」
「なるほどな。だったら、息子の期待に答えなくちゃいけないよな、音無」

「僕も音無さんが1番適任だと思います」

「どうせ誰かがやらねばならんだ。今回は、それがお前だっただけだ」

「日向……直井……椎名……」

周りを見渡すが、他の戦線も異論はないようだった。音無は皆の気持ちに推されるように決意を固めた。

「ミッション開始は1800よ。各自、それまでに準備をしておいて」

【ギルド最深部】

「作業はどうですか？」

ダークネスフォルスは端末を操作しているソルジャーの1人に尋ねた。

「はっ。前ははしくじりましたが、再生怪人及びロストソルジャー部隊の作成は順調に進んでいます。ただ属性攻撃……特に光や聖属性への耐性は低くなっております」

「うーん、やはり強引に戦力を増やそうとしすぎましたかね？ 量産よりもある程度質に重点を置いてください。あまり弱すぎても話になりませんから」

「分かりました」

ソルジャーはダークネスに返答すると、作業に戻った。

(しかし、参りましたねえ。この世界の人間があれほど戦いに精通しているとは思いませんでした。仮面ライダーもいることですし、ここもいつまでバレずに済むやら)

ダークネスが顔に手を当てて考えていると、爆発音が聞こえた。突如の事態にアロガンスは困惑した。

「どうしました?」

「奇襲です!! 奴ら、我々の知らない通路を使って最深部まで侵

入してきました!!」

「ただちに迎撃してください」

「間に合いません!!」

オペレーターを兼任していたソルジャーが告げると同時に壁が崩壊し、折れた剣の様な角が特徴的な黒銀のロボットが出てきた。だが、その腰に着けているベルトは間違いなくアロガンスに抵抗する仮面の戦士の物だった。

「仮面ライダーだと!?!」

「馬鹿な!! 奴はダークネス隊長に倒されたはずだ!!」

「うおおおおおお!!」

黒銀のロボット……デルフィングに変身した音無は叫びながら重長槍を構え、驚異的な脚力で突貫してソルジャーを1体貫く。

「なんてパワーだ……」

Gデルフィングに銃を向けようとしたソルジャーは頭を撃ち抜かれた。

「音無君、大丈夫?」

「助かったぜ、大山」

Gデルフィングは後方で狙撃ライフルを構えている大山に感謝しつつも重長槍でなぎ払った。

「足止めしつつ距離を取って包囲!!」

「そんなことさせないわ!!」

複数のソルジャーがGデルフィングに銃撃を加えようとするが、戦線メンバーの援護射撃によって蜂の巣になる。

(困りましたねえ。こちらは普通の人間より強いとはいえ戦闘用に編成された部隊ではないので少し不利ですね。しかし、あのライダーの戦い方はどこかで見ることがあるような……)

「見つけた!!」

Gデルフィングは右腰のホルダーからネイルダーツという名のナイフを3つ取り出してダークネスに投げつける。

「ちっ」

ダークネスは弾丸のごとき速さで迫るそれを体を傾けてかわし、右手からエネルギー弾を撃ち出す。Gデルフィングはエネルギー弾を重長槍で受け流しながら突っ込んだ。

(無駄のない動きで勢いを殺さずに回避しながら突貫……だが)

ダークネスはGデルフィングの突撃を左に弾避けると左足で蹴り飛ばす。その際、Gデルフィングは重長槍を手から離してしまう。

「ぐはっ!!」

「甘いですね」

「まだだ!!」

Gデルフィングは立ち上がると日本刀を両手で構えて斬りかかった。

「軌道が直線的すぎます」

ダークネスは軽々とかわし、部下の遺留品であるマシンガンブレードを2つ拾い、片方で再び襲いかかってきた斬撃を防ぐ。

「くっ……」

「隙だらけです」

ダークネスはもう片方のマシンガンブレードで素早くGデルフィン
グの腹部に連射する。

「くそっ!!」

「消えてください」

ダークネスは両手のマシンガンブレードから大量の銃弾をGデルフ
ィングに浴びせ、最後にグレネードを放って変身を強制解除させる。

「音無君!!」

ソルジャー部隊と交戦しているゆりが振り向く。

「ゆりっぺ、敵の増援だ!!」

「なんですって!!?」

別のスペースに通じている穴からロストソルジャーが次々と溢れ出
す。中には、再生怪人も混じっている。

「退路が塞がれてしまったぞ!!」

「もうおしまいだ!!」

切り札が撃ち破られ、絶望的な状況の中で戦線メンバーには悲壮感が漂い始めていた。だが、そんな絶望的な状況でも音無はよろめきながらも立ち上がった。

「ほう、まだ立てますか」

「まだ諦めるのは速い!! 刹那はたった3人の仲間と現世で戦い続けてきたんだ!! だが、俺達にはこんなにたくさん仲間がいるんだ!! 希望はまだある!!」

「その通りよ、結弦……」

突如、何もなはずの上空から奏が刹那を伴って舞い降りてきた。地面に降り立った刹那は音無に近づいた。

「後は俺がやる。父さんは下がって」

「ああ、すまない」

音無は腰に装着していたゲイザードライバーを刹那に手渡した。

「何度やっても無駄ですよ。あなた達では私に勝つことは出来ない」

「確かにお前は強いし、この状況は絶望的だ」

刹那は喋りながらドライバーを腰に巻く。

「ここで勝てたとしても未来を守ることは出来ないかもしれない。だが、たとえどんな未来が待っていたとしても戦い続ける！！それが仮面ライダーだ！！」

刹那が喋り終えたと同時にドライバーから一枚のカードが飛び出す。刹那はそれを手に取り、ドライバーに装填した。

「変身！」

《FINAL KAMEN RIDE: GATHER》

仮面ライダーゲイザー〜受け継がれし天使と悪魔の力〜EPISODE 5

《FINAL KAMEN RIDER: GATHER》

電子音と共に刹那の体は赤く発光し、その姿を変えていった。身にまとう鎧は赤く、力強さを感じさせながらも流麗さを感じさせるデザインで背中には機械的な赤い翼が発現し、天魔の剣聖「仮面ライダーゲイザー・エピオンフォーム」への変身を完了した。

「これが来世の俺と奏から受け継いだ刹那の力……」

音無を始めとする戦線メンバーからは感嘆の声が漏れていた。だが、アロガンズ陣営には激しい動揺が走っていた。

143

「エピオンだと!?!」

「そんな馬鹿な!! あの方は数年前に死んだはずだぞ!!」

動揺が走るアロガンズにゲイザー・エピオンはゆっくりと近づいていった。

「落ち着け!! エピオンが生きているわけない!! あれはただのこけおどしだ!!」

1人に引きずられるようにしてソルジャー数人がマシンガンブレードを連射させるが、ゲイザー・エピオンはそれらを全てすれすれのところで避けていく。

「なんで当たらねんだ!!」

「化け物か、こいつは!!」

無言で回避を行いつつ接近するゲイザー・エピオンの様子はソルジャーに更なる動揺を与え照準のブレにも大きく影響し、完全に的外れなところを撃つ弾もあつた。

「くそっ!!」

射撃を諦めたソルジャーはマシンガンブレードで接近戦を挑もうとする。ゲイザー・エピオンは右手に柄尻に最高級サファイアが埋め込まれた剣を召喚し、すれ違い様に次々とソルジャーを切り裂く。

「凍魔剣ニヴルヘイム……シナプスの科学者が我々を滅ぼすために作ったとされる剣まで持っていようとは!! その姿といいあなたはまさか第二世代フォルスなのですか!!」

「そうだ」

驚愕し、口調が乱れるダークネスにゲイザー・エピオンは淡々と答える。

「ならば、何故あなたは我々と敵対するのですか！？ その力は、害虫たる神族や魔族を滅ぼすためにある！！」

「父さんは言っていた。お前の道はお前が決める。だから、俺は自分の意思でお前たちと戦うことを決めた」

「なに偉そうなこと言ってんだよ」

「いい父親ぶりね」

ゲイザー・エピオンとダークネスの間でシリアスな空気が漂うなか藤巻とゆりが音無に絡む。ダークネスは自身の周囲に闇を発生させ、影を召喚する。

「行きなさい」

ダークネスの号令で影はゲイザー・エピオンを半円状に取り囲み、一斉に飛びかかる。ゲイザー・エピオンは左腕のシールドにある鞭状のヒートロッドでなぎ払い、影たちを消滅させていった。その隙をつこうと接近していたソルジャーも振り向きざまにニヴルヘイムで斬った。

「エピオンの息子を失うのは惜しいが、人類のためにここで消えてもらう!!」

「自分勝手な憎悪を世界の理とすげ替えるな!!」

ダークネスは右腕からエネルギー弾を連射する。グラウンドでゲイザーを奇襲した時ほどの威力がないとはいえそれなりの威力があるそれをゲイザー・エピオンはシールドで受け流したりニヴルヘイムで切り払いながら進んでいった。

「とどめだ」

ゲイザー・エピオンはカードを1枚取り出し、ドライバーに装填した。

《FINAL ATTACK RIDE:GATHER》

ゲイザー・エピオンは八双の構えを取る。その手に握るニヴルヘイムにはとてつもなく強大な冷気が収束し、圧縮されている。

「アブソリュートスラッシュ・封滅!!」

ゲイザー・エピオンは一気に走り寄り、冷気が凝縮された剣でダイ

クネスを斬った。ダークネスは斬られた箇所から凍り始めていった。それと同時にロストソルジャー、再生怪人部隊は活動を停止した。

「アロガンズはそう簡単には倒せません。これからあなたが進むのは棘の道ですよ」

「言われるまでもない」

「確かに不屈の戦士たる仮面ライダーには先刻承知でしたな」

そう言い残し、ダークネスは完全に凍った後砕けちった。それとほぼ同時に銃声音が聞こえた。ゲイザー達が振り向くと自害したソルジャーの遺体があった。

『敵戦力は完全に沈黙しました。増援の気配もありません』

「俺達、勝ったんだな」

「よっしやあああああ！！」

遊佐の報告を聞いた戦線メンバーは歓声を挙げたり、肩を組んだりした。ゲイザー・エピオンも変身を解除し、外へ出ようとしたら奏が腕をつかんだ。

「母さん…」

「どこ行くの……?」

「敵は倒した。後は、俺がいなくても問題ないだろう」

「そう言っなよ」

日向と肩を組んだ音無、音無に付き添う形で直井がやってきた。

「物語つてのはただボスを倒せば終わりじゃない」

「俺達、卒業式をやるんだ。お前も出るよ」

「せっかくだしな。特別に認めてやる」

「刹那……」

小柄な奏が優しく刹那の手を握りしめて見上げてくる。刹那はそれを見て顔を赤らめる。

「仕方ない、母さんがそう言っなら」

ちなみに、刹那の世界において音無と刹那がともに奏に逆らったことはない。可愛らしすぎて敵意を抱くことがない（類似例として時雨あま）のだ。

「ガルデモっていうバンドがいるんだけどよ、これがすごいんだよ。記念に聞いていけよ」

「そうなのか？」

「ああ、すごいぜ。NPCも含めて皆が夢中になるんだ」

「気に入ったんなら手を出しても構わないわよ」

日向に刹那、音無が話しているとゆりが割り込んできた。

「特に入江さんなんかあなたの好みじゃないかしら？ 部屋の番号を教えるから押しかけなさい」

「悪いが遠慮させてもらう。俺には好きな人がいるからな」

「ああ、この前話していたリインちゃんのこと？ 兄妹どうしの恋愛ってまたマニアックねえ」

「向こうはその気になっているが断じて違う」

「どつでもいいけどこいつらはどうするんだ、ゆりっぺ？ ほっておくと復活するかもしれないぞ」

藤巻が遠くからゆりに喋りかける。

「んぐ、そうね。皆でちゃちゃっと片づけちゃいましょう。それから材料を調達して宴会よ。あなた達も手伝ってね」

「分かったぜ、ゆり」

「まったく、少しは休ませろよ」

「神である僕に命令するな」

刹那は無言で音無と立華に近寄り、手を繋いだ。

「刹那？」

「せっかくだし3人で一緒にやろうよ」

「そうだな。じゃあ、行くぞ」

音無の号令で刹那はその温もりを噛み締めつつ2人と一緒に歩き出した。

仮面ライダーゲイザー〜受け継がれし天使と悪魔の力〜EPISODE FIN

にじファンのお知らせにより掲載していた『Shine Days』の歌詞を消しました。

それを念頭において本文をお読みください。

【体育館】

「ライブ行くぞー!!」

『イエーイ』

体育館には、戦線メンバーを含む大勢の生徒がいた。あちこちにテーブルが並べられ、その上には料理がところ狭しと置かれ、ガルデモのライブと共に楽しまれていた。刹那は音無や日向と一緒に寿司を手にライブを観賞していた。

「なるほど、皆が熱くなるのも分かる」

「だろ」

「で、これは何ていう曲なの、父さん？」

「Shine Daysっていう曲だ」

刹那は料理をあまり食べずに歌を聞きながらガルデモのメンバーを見ていた。

「で、誰が好みなんだ？　ここならお前の恋人もいないし　分か
ったからライドブッカー？の銃口をこっちに向けるな」

「分かれればいい」

刹那はライドブッカー？を収納し、再びライブ観賞に戻った。

「そう言えば奏はどこにいるんだ？」

音無が辺りを見渡すと、左前あたりでライブそっちのけでマグマの
様に赤い麻婆豆腐を一心不乱に食べている奏の姿があった。

「せつかくのライブなものにもつたいねえなあ」

「ハハハ、あいかわらずだな」

「母さん、この頃から麻婆豆腐が好きだったんだ」

刹那は奏に近づき、側にあった鍋から麻婆豆腐を皿にすくって食べ
た。

「うん、お袋の味だ」

「そうなの……」

「おい、待て!!」

麻婆豆腐を平然と食べた刹那を見て日向が突っ込む。

「お前、激辛で誰も食べたがらないこの麻婆豆腐をお袋の味と言っ
たな？」

「うん」

「私、来世でも麻婆豆腐が好きなんだ……」

「んなこと言ってる場合か。お前、子供になに食わせてんだ!？
仮にも母親たる!! 音無も止めるよ!!」

「いや、今言われても困るんだが……」

日向の突っ込みに音無は頭をかきながら応える。

「ちなみに、今でも時々作って食べている。義妹は苦手みたいだが
……」

「お前、いつペン病院に行って診察してもらえ!! 絶対に味覚障
害だぞ!!」

「問題ない、マメに受けている定期検診では異常が確認されていな

い
「

刹那は日向と受け答えしながら麻婆豆腐を食べ続けた。

(こつこつお祭り騒ぎにはあまり参加したことなかったが、良いものだな)

刹那はしみじみと感じていると、急に違和感を感じた。

(役割を終えた者は早々に立ち去れということが……)

刹那が表情を変えたことに気づいた音無は声をかけた。

「どうしたんだ、刹那？」

「母さんと一緒に少し外へ来てほしい。もう時間がないみたいだ」
「分かった」

音無は真剣な顔で答え、奏も首を縦に振り、刹那と一緒に外へ出た。外へ出た3人はしばらく歩き、グラウンドで足を止めた。

「もう少し2人と一緒にいたかった」

「なあ、本当にもう帰らなければいけないのか？」

「本来ならダークネスが消滅した時に戻るはずだったんだ。それに、俺は本来ここに存在すべき人間じゃない」

音無は悲しそうな顔で聞くが、刹那は静かに否定する。

「ここにいろ……とは言えないな。向こうには義妹や恋人がいるんだからな」

「刹那……」

奏が口を開いた。

「この先、とてもつらいことが起こるかもしれない。だけど、決して無理はせず絶望しないで。耐えきれなくなったら周りを頼って……。あなたには信頼できる人がいるんでしょ？」

「うん」

「あなたはあなたの道を進んで。私達のことや大切なのは分かるけど、それにとらわれすぎちゃ駄目よ」

「うん……」

刹那は涙目になりながらも答えた。

「大丈夫さ。お前ならきつと出来る。なんたつて俺と奏の息子なんだからな」

「ああ」

音無と刹那は右手の拳を付き合わせる。その瞬間、刹那は死後の世界から消えた。

【この世・風都】

数日ぶりに死後の世界から帰ってきた刹那はダークネスと初めて出会った場所に出てきた。

「ここに出てきたか。それにしても……」

あの後、翔太郎が呼んだのだろう。辺りには、パトカーが複数展開し、事件現場でよく使われる「KEEP OUT」の黄色いテープが張られていた。

「警察に見つかったら面倒だな」

刹那は周囲を確認しながら警察に見つかからないようにその場を離れ、ある程度距離を取ったらバイクで自宅へ向かった。

「ただいま」

刹那が自宅の扉を開くと、涙目のイカロスが抱きついてきた。

「無事で良かった……本当に心配したんですよ……」

「心配かけてすまなかったな、イカロス」

刹那はイカロスを優しく抱き止め、イカロスも刹那をより強く抱きしめる。その後ろからは、ラインが出てきた。

「どこで何をしていたんですか、お兄ちゃん？」

「死後の世界で両親と一緒にアロガンスと戦っていた」

「そうですか」

リインは普段あまり見せない優しい笑みを刹那に向ける。

「我が家秘伝の味はあの世界で発祥したらしい」

「そこ、地獄じゃないですよね？」

「違う」

刹那がリインと喋っていると、イカロスが若干膨れっ面 普段の表情とあまり見分けはつかないが になって刹那を見つめた。

「ずるいです……リインとばかり喋って。今日は、私と寝てもらいますよ」

「別に構わないが、少し無防備すぎないか？」

「あなたが相手なら本望です」

（あの狸、アインハルトだけではなく今度はイカロスまで毒牙にかける気か？）

「あー！ー！！ ずるいですよ、イカロスさん！！ 私もお兄ちゃんと一緒に寝たいですー！！」

「ねえ、あんた達。これのこと忘れてない？」

刹那が異世界で何かを企んでいるであろう狸（いちおう人間）の顔を思い出していると、ニンフが家から小包を持って出てきた。

「ニンフ、お前も来てたのか」

「まあね。これ、あんた宛に届いた荷物よ」

刹那はイカロスといったん離れ、小包を受け取った。

「なんだ、これは？」

刹那がその小包を開けると、中には1枚の紙が入っていた。

「ちゃんと俺の分も用意してくれていたんだ……」

それは、死後の世界の住人が生き抜き、成仏した証でもある卒業証書だった。

怪人ファイル

名前：ソルジャーフォルス

タイプ：量産タイプ（オリジナル）

外観：（通常タイプ）ヘルメットを被り、茶色で兵士然としている。
（Aタイプ）シャツをイメージした流線型のボディで体は青い。

武器：マシンガンブレード、水陸両用ライフル、バズーカ

登場話数：第3話以降

説明：兵士の記憶を身体に埋め込まれて作られた怪人。アロガンスの一般戦闘員で戦闘能力もそれほど高くないが、数が多く、用途に合わせて武器を変えたり、改造されたりすることがある。

Aタイプ 水陸両用型で簡易ソナーが装備されていて、探査・射撃能力が通常より向上している。また、その形状から防御力もじゅっかん上昇している。なお、本作品における水中適応型のフォルスは近接型でもデフォルトでソナーを装備している。

名前：セパルクュラフォルス

タイプ：ワームタイプ

特殊能力：クロックアップ

外観：仮面ライダーカブト参照

登場話数：第3話

説明：仮面ライダーカブトに登場したセパルクュラワームの記憶を埋め込んで作られた怪人。アロガンスが公に風都を襲った時に初めてゲイザーと交戦した怪人で、スカウトするが、即行で断られた。戦闘においては、終始ゲイザーに翻弄されていた。

名前：トリロバイトフォルス

タイプ：アンデッドタイプ（スペードの7）

特殊能力：体を金属化する程度の能力

外観：甲羅とカタツムリのような目を持つ

登場話数：第4、5話

説明：仮面ライダーブレイドの世界に生息するトリロバイトアンデッドの記憶を埋め込んで作られた怪人。作者のド忘れが原因でかなり設定が改変されており、原作と違って盾は装備していないが、ラウズカード時の特殊能力を使うことができ、その防御力で風都の仮面ライダー達を苦しめた。

名前：スズメバチヤミー

タイプ：ヤミー（オリジナル）

武器：左腕に装備された槍状の突起物

特色：空戦能力

外観：人型化した蜂

登場話数：第6、7話

説明：刹那と同じ高校に通う山田黒助という少年の欲望から産み出された虫系のヤミー。本来、ゲイザーに匹敵する格闘能力を持ち合わせているが、ドジを踏んだためにその真価が発揮されることはなかった。

名前：ウヴァ

タイプ：グリード

武器：左腕の爪

特色：雷撃を放つ程度の能力（内包するコアメダルの数や種類によ

つては、使用不可と思われる)

外観：仮面ライダーオーズ参照

登場話数：第6、7話

説明：2011年7月現在、放送中の仮面ライダーオーズからのゲスト。セルメダルを稼ぐために風都にやってきてゲイザーにバースと交戦するが、最後はゲイザーのライダーステイキングを食らって退散した。

名前：ダークネスフォルス

タイプ：オリジナル

武器：エネルギー弾(チャージ可)、マシンガンブレード×2(ソルジャーフォルスの物を無断拝借)

特色：影(影によって倒された敵は影となる)を生産する程度の能力、死者を使役する程度の能力

外観：闇を象徴するかのような黒い怪人

登場話数：劇場版仮面ライダーゲイザー(受け継がれし天使と悪魔の力) プロローグ(EPISODE5まで)

説明：暗闇の記憶を埋め込んで作られたアロガンスの上級怪人。戦力増強のため、死後の世界を根城に活動していた。戦闘が本分ではないが、刹那と一時的に変身した音無を強制的に変身解除させるほどの戦闘力を持っている。再生怪人部隊で死んだ世界戦線を壊滅寸前にまで追い込むが、ゲイザー・エピオンフォームに変身した刹那のアブソリュートスラッシュ・封滅で完全に消滅させられた。

名前：ソーシャークフォルス

タイプ：オリジナル

武器：ノコギリ状の剣

特色：鮫肌(素手による直接攻撃を受けた場合相手にもある程度ダ

メージを与える)

外観：鮫型の怪人

登場話数：第9、10話

説明：ノコギリザメの記憶を埋め込んで作られ、海水浴を楽しむ刹那達の前に現れたフォルス。神魔抹殺のために30体も部下を連れてくるが、暴走したイカロスの逆鱗と照井竜の八つ当たりによって一蹴されたため、一時撤退する。しかし、フィリップの情報により駆け付けたゲイザーに潜水艦を撃墜され、合流部隊もあつという間に片づけられた。その後、善戦するもダブルHMのメタルブランディングに倒された。

名前：スクウイッドフォルス

タイプ：オリジナル

武器：槍

特色：黒い霧を発生させる程度の能力

外観：イカ型の怪人(視界をふさがれた後で登場したため、ライダー達は姿を確認していない)

登場話数：第10話

説明：イカの記憶を埋め込んで作られ、ソーシャークの援軍として現れたフォルス。霧を発生させて視界をライダー達の視界を奪うが、Gクウガ・ペガサスの狙撃により倒された。

名前：オックスオルフェノク

タイプ：オルフェノク

武器：握り拳状の鉄球

特色：ケンタウロスの様な疾走態に変身することで得る優れた速度、突撃力

登場話数：第11、12話

説明：仮面ライダーファイズに出てきたオックスオルフェノクの記憶を埋め込んで作られた怪人。オリジナルを上回る戦闘力を保有しているが、仮面ライダーとの戦闘を可能な限り避ける作戦だったため、その真価は発揮されなかった。最後は、Gファイズのクリムゾンスマッシュによって消滅させられた。

名前：アルマジロオルフェノク

タイプ：オルフェノク

武器：剣と盾

特色：今のところなし

登場話数：第12話

説明：第11話のラスとにてオックスオルフェノク率いる部隊の襲撃によりオルフェノク化した風都警察署の警察官で、当初はやけになっっていたが、同じ怪人であり、仮面ライダーでもある刹那の説得により警察官としての職務を遂行することを決意する。元々が訓練されているだけありソルジャーフォルスを凌駕する戦闘能力を持つ。

第9話『探索者A/見せどころのない主人公』

「海だああー！ー！ー！！！！」

更衣室から出た智樹と白いビキニで体を包んだアストレアは海岸に向かって走っていった。

「トモちゃん！まずは、場所の確保が先だよ！！」

「そはら。確実に聞いてないぞ、あの2人」

注意しようとするそはらに対し、刹那は冷静に事実を告げる。

「グスツ……。どうして亜樹子は風邪なんて引いてしまったんだ？」

「しっかりしなさいよ。アンタ、それでも仮面ライダーなんでしょ？」

「よしよし」

奥さんが風邪を引いてキャラが崩壊するレベルで落ち込みまくっている照井竜をニンフが叱咤激励し、空色ビキニのラインが頭を撫でている。ちなみに、フィリップは亜樹子の看病である。

「照井さんも当てにならないから俺達だけでやるしかないな、翔兄」
「ったく、どいつもこいつも……」

ブックサ言いながらも翔太郎は刹那と一緒に荷物を持ち、空いている場所を探そうとした。その2人に白フリルをあしらった紺のビキニを着たイカロスが近づいていった。スタイルを強調しながらも可愛らしさも備えたその水着に目を引かれない男性はいないだろう。

「イカロス、遅かったじゃないか」

「似合っているかどうか少し不安だったんです。どうでしょうか、刹那？」

喋りかける翔太郎にイカロスはモジモジしながら答える。

「とても似合っている……」

刹那は見とれるあまり表情が固くなる。

「さっそくで悪いが、場所取りを手伝ってくれ。まともに分ける奴が少ないんだ」

刹那は荷物を全て右手で持ち、空いた左手でイカロスの右手を取る。

「はい……」

（なんか居心地悪いな……）

（私もトモちゃんとこんな風になれたらいいな）

イカロスは嬉しそうに、そらは羨ましそうな視線をイカロスに向けてながら、翔太郎は気まずそうに歩いていった。

「夏といたらまずはスイカ割りだね」

「スイカはちゃんと持ってきた！ しかも、2つ！！」

智樹は鞆から取り出した2つのスイカを胸のところで抱える。そのスイカを見たイカロスはわずかに反応を見せたが、誰も気づかなかった。

「もつっ！！！ トモちゃんったらこんなところに来てまでそういうことをする！！！」

「誰が最初にやるかジャンケンしようぜ！！ 最初は、グー」

皆がジャンケンをしようとしたその瞬間、一筋の閃光がスイカを貫き、爆発させた。

『……………』

スイカまみれになった一同が海の方を見ると、波しぶきが発生し、右手にノコギリのような剣を装備した鮫型のフォルスが出てきた。それに続いて水中戦を意識した流線形ボディの青いソルジャーフォルスAが30体ほど陸に上がってきた。

「A小隊は辺りの港を閉鎖しろ！！ その他は魔族と神族を抹殺しろ！！！」

『了解』

悲鳴と怒声を上げ、人々は我先にと逃げていった。鮫型のフォルス……………ソーシャークフォルスの命令を受けたソルジャーフォルス達は頭部に装備された簡易ソナーで辺りを探索し、ある一般人へ水陸両用ライフルを向ける。

「待てっ！ 俺は人間」

泣き叫ぶ人間は容赦なく銃弾を叩き込まれ、絶命した。

「嘘を着いても無駄だ。俺達には魔力の有無が分かるんだからな！」

別れたソルジャー達は無慈悲な鉄の雨を降らしながら進軍していった。

「このっ！！ 化け物が！！」

魔族の青年が魔力弾をソーシャークフォルスに直撃させるが、ソーシャークはかすり傷一つ負わなかった。

「そっ、そんな……」

「ゴミが……。やれ！！」

ソルジャーは命令に従い、魔族を蜂の巣にした。

「野郎……」

「智樹達は一般人の避難を！！ 奴は、俺と翔兄が倒す！！」

「分かった。ドラグレッダー！！」

智樹が呼ぶと、近くにあった鏡からドラグレッダーが飛び出し、人々に襲いかかるソルジャーを妨害し始めた。

「イカロスも早く避難を……」

刹那が後ろを振り向くと、イカロスは怒っていた。いつもと同じ無表情だが、明らかに怒っていた。

「許さない」

イカロスは目が赤くなり、背部の翼から羽根の様なミサイルを山のように撃ち出す。ソルジャーAは先ほどまでとは逆に刈られる側に回っていた。

「久しぶりに見ましたよ、イカロスさんのウラヌスモード」

「ウラヌスモード？」

何も知らない刹那は首を傾げる。

「要するに、大好きなスイカを破壊されてブチ切れたことで覚醒したと思えばいいわ」

「分かりやすい説明ご苦労」

「あいつ、そんなにスイカ好きだったのか……」

ニソフの要点をかいつまんだ説明に刹那は感謝し、智樹は感心する。だが、一行は気づいていなかった。ここには、もう1人鬼神がいることに……。

「亜樹子の仇iiiiiiiiiiii!!!」

《ACCEL》

「いや、亜樹子は死んでないから!」

寂しさを怒りに変えた照井が仮面ライダーアクセルに変身し、エンジンプレード片手に突撃した。カラーも相まって北の傭兵と戦っている時の某赤の悪魔憑きを思わせる凄まじい戦ハッ当たりいを見せている。おもしろ半分でアストレアもクリュサオルとシールドを構え、戦いに加わった。

「……俺達の出番がまるでないな」

「たまにはこういうことも有るさ」

意気消沈している刹那の肩を翔太郎が哀愁漂う表情で叩く。リインはそんな状態の刹那き声をかけた。

「あのお、敵のリーダーが向こうに逃げていきますよ」

リインが指さす方向を見ると、ソーシャークフォルスが逃げていくのが見えた。

「どうやらまだ仕事が残っているようだぜ」

「ライダーに休みは無しってか。バイクを持ってきておいて正解だったな」

「フィリップに検索してもらって先回りするぞ！！」

「リイン、後は頼む」

「分かりましたです」

2人はその場をリイン達に任せ、フォルスの追跡に専念することにした。

第10話 『探索者A / 2人のS』

「くそっ!! あんな化け物みたいな奴らがいるなんて聞いていないぞ!!」

壊滅状態にある部下たちを見捨てる形で海の中を泳いで逃走しているソーシャークがぼやいた。

「愚痴を言っても仕方ない。いったん合流ポイントまで下がるか」

ソーシャークがしばらく泳ぐと、切り立った崖がある海岸近くに潜水艦が見えた。その周辺には、見張りのソルジャーAが数体見えた。

「あれが合流ポイントだな！」

ソーシャークは陸に上がり、ソルジャーAに近づいた。

「隊長！」

「作戦は失敗だ!! 一度撤退す」

「熱源接近! ミサイルが3つです!!」

部下の報告にソーシャークが反応する間もなくミサイルは次々と潜水艦に着弾し、爆発させた。

「いったいどこから攻撃された?!?!?」

「隊長、右を見てください!!」

ソーシャークが右を見ると、ミサイルランチャー「ギガント」を構えたゲイザーとダブルCJがバイクで向かってくるのが見えた。ゲイザーは照準をソーシャーク達に変え、再度ギガントが火を吹いた。

「くっ!!」

ソーシャークはミサイルをなんとか避けるが、後ろにいたソルジャ―A達は爆発に巻き込まれ、更なる爆発を起こした。

「意外とあつけないな」

「いきなりギガントを全弾ぶちこんどいてよく言っぜ」

バイクから降りたゲイザーはライドブッカー?・Sモードを構え、ダブルCJと共に攻撃を仕掛けた。

「くっ!!」

ダブルC」は右ストレートをソーシャークに決めるが、ソーシャークだけでなくダブルもダメージを受けた。

「いってえ。なんだ、こいつの体は？」

【奴はノコギリザメの記憶を元に改造されている。奴を殴るのは、やすりを殴るのと同じだ】

右手を振るダブルに対し、ソーシャークが鼻で笑う。

「なら、これでどうだ!？」

ゲイザーがライドブツカー?で袈裟に斬りかかる。ソーシャークもノコギリ状の剣で応戦する。つばぜり合いになるが、ソーシャークが強引にパワーで押し切り、切り裂いた。

「パワーもあるか。近接型にはとことんやりにくい相手だな……」

【距離を詰めるのは危険だ。2人共、棒で戦うんだ】

「分かったぜ、フィリップ」

「棒術はあまり自信がないが、仕方ない」

ゲイザーはカードを取り出し、ダブルも2本のメモリを取り出した。

《KAMEN RIDE: KUUGA》

《FORM RIDE: KUUGA DRAGON》

《HEAT・METAL》

ゲイザーはGクウガ・ドラゴンにダブルはHMにフォームチェンジした。Gクウガ・ドラゴンはそこから辺の流木をドラゴンロットに変化させ、軽く振り回して感触を確かめた。

「翔兄、初撃は頼むよ!!」

「了解した」

「いつまでも待たせるな!!」

ソーシャークが斬りかかってくるが、Gクウガ・ドラゴンは回避してダブルHMはメタルシャフトで受け止める。

「くっ!!」

「このまま切り刻んでやる!!」

「そうはいかない!!」

Gクウガ・ドラゴンがドラゴンロッドでソーシャークの足を引っかけ、転ばせる。

「小癩な!!!」

「後ろがから空きだ!!」

ソーシャークは素早く立ち上がり、Gクウガ・ドラゴンに攻撃しようとするが、ダブルHMが背後から痛恨の一撃を決める。

「はい、隙あり」

Gクウガ・ドラゴンはたたらを踏んでいるソーシャークを再び転ばせ、剣を遠くへ弾き飛ばす。ダブルHMはメタルシャフトをソーシャークの首元に突きつけた。

「もう勝負は決まった。投降しな」

「ここまでか……」

ソーシャークが目の前の現実を受け入れようとすると、周辺に黒い

霧が発生した。その後、鞭がしなるような音がしてソーシャークが引きずられた。

「大丈夫か、ソーシャーク!?!?」

「助かったぞ、スクウィッド」

(スクウィッド……イカ型の怪人か)

【霧で視覚を奪うのか。厄介だね】

Gクウガ・ドラゴンが敵の正体を推測し、フィリップが苦い顔をす
る。

「戦えるか、ソーシャーク?」

「武器は無くなったが問題ない」

「まずい!?! ひとまず霧の外に出るぞ!?!」

「させるか!?!」

ダブルHMとGクウガ・ドラゴンは脱出しようとするが、スクウィッドフォルスが槍で2人に突きを入れる。

「さっきの仕返しだ!!」

ソーシャークが霧の中に突っ込み、ダブルHMに飛び蹴りを決める。

「翔兄!!」

「よそ見している暇はないぞ!!」

スクウィッドが槍でなぎ払いと突きを絡めたGクウガ・ドラゴンを攻撃しようとするが、Gクウガは剣士としての勘でなんとかさばいていく。

「ちいつ、なかなかしぶといな!!」

(このままじゃジリ貧だ!! 今は、気配でなんとかできているが……気配? そうだ!?)

Gクウガ・ドラゴンは自慢の跳躍力で霧の中から脱出し、崖の上に着地する。

「これなら敵の姿が見えなくても問題ない」

《FORM RIDE: KUUGA PEGASAS》

Gクウガ・ドラゴンは狙撃を得意とする緑のペガサスフォームに姿を変え、流木となったドラゴンロッドを捨て、ペガサスボウガンを構えた。敵は警戒して黒い霧を増やすが、五感が鋭く研ぎ澄まされているGクウガ・ペガサスが相手ではむしろ逆効果だ。Gクウガ・ペガサスは集中力を最大限発揮し、わずかな動き、呼吸の音、空気の乱れを感知し続け、スクウイッドの位置を察知した。その刹那、Gクウガ・ペガサスは引き金を引き絞り、圧縮空気の弾丸がスクウイッドの額を貫いた。

「ばか……な……」

スクウイッドは爆発し、霧を吹き飛ばした。

「スクウイッド!？」

「こっちもとどめだ!!」

《METAL: MAXIMUM DRIVE》

ダブルHMは両端から炎が吹き出すメタルシャフトを振り回し、勢いをつけながらソーシャークに駆け寄る。

「【メタルブランディング】」

ダブルHMが放った灼熱の一撃は動揺していたソーシャークの命を

確実に刈り取った。

「こんなに騒がしい戦いは、ミュージアムとの戦い依頼だな」

ダブルHMは変身を解除しながら漏らした。

「そうだな」

崖の上にはいたはずの刹那が何気なく翔太郎の側にいた。

「お前！？ いつの間にかこっちへ来たんだ!？」

「ガードスキルを使った」

『つくづく常識外の存在だね、君は』

フィリップがメモリガジェットのスタッグフォンを介して2人の会話に入ってきた。

「それは置いといてひとまず戻るよ。皆、心配しているだろうし」

「だな。向こうのカオスが収まったかどうか確認も必要だしな」

剎那はバイクを回収しながらふと思案した。

（なぜアロガンスは数ある港の中でもこの港を襲って来たんだ？
神族や魔族なら他の港にも大勢いるだろうに）

剎那は疑問に思いながらもゲイズチエイサ に跨り、イカロス達の所に戻った。

第11話『灰色のD / 無邪気な混沌』

【風都、河原】

「翔太郎君、猫は見つかった？」

「駄目だ、全く見つからねえ」

鳴海探偵事務所の3人は猫探しの依頼を受け、河原を搜索していた。

「なんで僕まで猫探しに付き合わされるんだ？」

事務所の頭脳労働担当のフィリップはぶつくさ文句を言いながら草を掻き分けながら猫探しをする。

「部屋にこもってばかりだと身体に悪いからよ」

「僕はそこまで言われるほど引きこもりじゃないよ」

「おい！ 無駄口を叩いてる暇があったらさっさと猫を探せ！！」

自称ハードボイルドは2人を一喝する。

「んっ？」

フィリップは顔を上げて空を見たときにふと違和感を覚える。

「どうした、フィリップ？」

「空から何かが近づいてきている」

側にいた亜樹子も興味津々に近寄ってきて「なんだなんだ？」と見上げてみると、瞬間に何かはグングンと近づき、大きな音を立てて翔太郎達の近くに墜落した。

「うわっ！？」

「なんだい、これは！？」

「確かこの間も似たような事があったよな」

亜樹子とフィリップが驚くなか、翔太郎は割と冷静だった。墜落によって発生した土煙が収まると、クレーターの中心部に黒い修道服を着た幼い女の子の姿が見えた。そのかつこうもさることながら少女を最も異質に感じさせるのは、背中から生えている手術用具のような翼だろつ。

「お前、もしかしてイカロス達と同じ世界の住人か？」

翔太郎が恐る恐る近づきながら尋ねる。その口から発せられた言葉に少女は食いついた。

「イカロスお姉ちゃんのことを知っているの!？」

「ああ、今は幼なじみの家に居候中だ。それより、君の名前はなんて言うんだい？」

「私の名前はカオスって言うの。よろしくね」

「俺は左翔太郎だ。よろしくな」

翔太郎とカオスは挨拶する。だが、この場にいる誰もが気づいていなかった。カオス墜落の衝撃で吹き飛んだスタッグフォンに着信が入っていたことを……。

【工藤家・リビング】

刹那はリビングのテーブルから家庭菜園に増設されたスイカエリア

に水やりをしているイカロスをじっと無表情で見っていた。

「お義母さんも時々そうしていましたが、じっと見ているだけでよく飽きませんね」

家の中であるのをいいことにノースリーブの白いタンクトップに青い短パン姿のリインが話しかける。

「そうでもないぞ」

「そんなに女性の体が見たいのなら私を好きなだけ見てくださいよ、お兄ちゃん」

リインが刹那に抱きつきながらささやく。少なからぬ愛情を義妹に注ぐ身としては嬉しいのだが、刹那は表情を変えようとしない。そのまま恋人ウォッチングを続けていたら携帯に着信が入ったので手に取る。

「もしもし」

『照井だ。少し見てもらいたい奴がある。そつちにデータを送るぞ』

刹那は送られてきた画像を 통화状態を維持した上で再生する（それが出来るよう携帯は設計されている）。そこには、死体のあった場

所を示す白いテープと灰だけだった。

『3時間前、突然そうだったそう。何か分かるか？』

「十中八九オルフェノクの仕業でしょう。しかし、不味いですね」
『何故だ？』

「それは……」

刹那が説明しようとした途端パトカーのサイレンが鳴り響く。

「まずは、事件現場に向かいます。話はそれからです」

『そうだな』

刹那は通話を切り、ラインの拘束から素早く抜け出し、イカロスに外出を告げて事件現場に向かった。

【市民ホール前】

『お前はもう包囲されている！ 速やかに投降しろ！！』

『そつだそつだ!!』

照井の部下である刃野と真倉が何台ものパトカーにより囲まれている灰色の牛型怪人オックスオルフェノクにメガホンで投降を呼び掛けていた。

「今回は楽勝でしたね」

「まだ油断するなよ。相手はドーパントと同じ怪物なんだからな」

「もう包囲網は出来上がっているんです。問題あり」

真倉の遮るようにバズーカ弾が飛来し、パトカーを1台撃破した。それに続くようにソルジャーフォルスの部隊が出てきて警官隊を奇襲した。

「いつもより数が少ないと思ったら近くに隠れていやがったのか!」

奇襲による混乱でろくな反撃も出来ずに警官は1人また1人と命を落としていった。刃野と真倉があたふたしていると、仮面ライダーアクセル・バイクモードが高速で乱戦の中に飛び込み、ソルジャーを1体轢き飛ばした。

「仮面ライダーだ！！ 仮面ライダーが現れたぞ！！」

「同胞の無念、ここで晴らさせてもらおう！！」

ソルジャーは強襲してきたアクセルを迎撃すべく銃口を向けるが、パトカーを通じてミラーワールドから出てきたゲイザーが背後から切り裂く。

「今回は、貴方が1番乗りですか」

カウンターキックでソルジャーを蹴り飛ばしながらゲイザーは話しかける。

「警察というのは事件に対して迅速に対応するものだからなっ！！」

人型に戻ったアクセルはエンジンプレードでソルジャー部隊をなぎ払いながら応えた。ゲイザーは辺りをキョロキョロ探し、オックスオルフェノクを見つけた。

「お前が指揮官だな！！」

「くっ、可能な限り仮面ライダーとの戦闘は避けると言われている！！ 撤退だ！！ 撤退するぞ！！」

オックスオルフェノクは巨大化し、ケンタウロスをイメージさせる疾走態へと変化し、ゲイザーが現れた方向とは逆方向へと全力疾走した。ソルジャー部隊もスモークチャフを展開して撤退していった。それを見てゲイザーは心の中で舌打ちした。

「今は、とても追撃出来るような状況じゃない。体勢を整えるぞ」
「分かっています」

2人は周りを見渡し、生存者を探すが、警官隊は半壊状態で、無傷な存在を探すのがかなり困難な状況だった。

「かなり手酷くやられましたね」

「救急車を呼んでくれ。俺は被害状況を確認する」

「分かりました」

ゲイザーが携帯を取り出ししていると、アクセルは地面に倒れていた警官の1人の指がピクリと動いたのを見過ごさなかった。

「う……………」

「おい！ しっかりしろ！！」

アクセルが急いで近づき、体を起こすと、体がオックスオルフェノクと同じ灰色に発光し、点滅を繰り返した。

「これは一体どういうことなんだ……？」

アクセルは目の前で起こっている現象に自分の目を疑い、呆然とした。

第12話『己が何であるか』

【風都病院】

緊急治療室と書かれた扉から照井が出てきた。その近くで刹那が壁にもたれて待っていた。

「刹那、なぜこんなことになった？」

「使徒再生ですよ」

刹那は何について聞かれるのかあらかじめ予想がついていたので話をなめらかに始める。

「使徒再生？」

「要するに、吸血鬼が人間を襲って吸血鬼にするようなものですよ。人によっては、普通に死ぬだけでそうなることもあります」

「理性とかはどうなる？」

「ガイアメモリの様な毒素はないですが、道を誤る者が多いのも事実です。それだけならなんとかかなりそうなのですが、問題はそれだけではありません。オルフェノクとなった以上あの警官はそんなに

長く生きられない。後10〜20年で今度は完全な死を迎えるでしょうね」

「奴を……奴を助ける手立てはないのか？」

「今までに長寿を全うしたオルフェノクは確認されていません」

「そうか……」

刹那が悲しそうに告げると、照井は顔を俯けながらそう答えるだけであった。それ以上会話が続くことはなく、刹那は会釈してからその場を去り、帰宅した。

【工藤家】

「ただい
」

刹那が玄関の扉を開け、帰宅を告げようとしたところ黒い修道服に身を包んだ見知らぬ少女と目があった。

「私、カオスって言うの。よろしくね、刹那お兄様」

「なんで俺の名前を知っているんだ？」

「探偵のおじちゃんが教えてくれたの」

「翔兄か」

刹那の知り合いで探偵のおじちゃんと言えば1人しか該当する人物はいない。本人が聞いたら間違いなくコーヒーを吹くだろうが、放っておくことにする。

「カオスちゃん、お代わりが入りましたよ」

「ありがとう、リンちゃん」

「家の中は走っちゃだめ……」

走り込むカオスに着いていく形で刹那もリビングに入って席につくと、イカロスがココアとチョコケーキをお盆にのせて持ってきてくれた。刹那は黙ってココアを飲み始めた。

「どうしたの、お義兄ちゃん？」

「先ほどからほとんど喋っていませんが、何かあったんですか？」

普段でも無口な時は無口な刹那だが、一緒にいる時間が長いためにリンとイカロスは雰囲気察したのだろう。刹那はまだ幼いカオ

スがいるため、戦闘で人が死んだという事実は話さないことにした。

「辛いことがいろいろと重なっただけだ」

「辛いことがあったの？」

カオスが刹那の顔を覗きこむ。

「少しこっちに頭を寄せてくれる？」

「？ とうか？」

意図も分からぬまま刹那は頭を向けると、カオスは刹那の頭をよしよしと言いながら撫で始めた。

「私が、泣きなくなったりした時はよくお母さんがこうしてくれたの」

そこにあるのは、ただ相手を思いやる優しさだけだった。故に、訂正や突っ込みは不要だった。

「ありがとう、カオス」

「どづいたしまして」

多少元気になった刹那にカオスは屈託のない笑顔を向ける。

「ようやく元気になりましたね」

「もう大丈夫だ」

刹那が改めて席に着き、ケーキを口に運ぶと電話が鳴った。

『病院にいる例の警官が狙われている！！ すぐに来てくれ！！』

「やれやれ、本当に空気を読まない連中だな」

「ケーキは残しておきますので心配しないでください」

「助かる」

刹那は一口だけ食べると慌てて家を飛び出していった。

【風都病院・緊急治療室】

「1」……「2」は？ 俺は死んだはずだぞ」

アロガンスとの戦いで倒れた警官は緊急治療室にあるベッドの上で目覚め、自分の腕が一瞬怪人化するのを直視した。

「そういうことか……」

警官は絶望と共にだいたいの事情を悟った時、緊急治療室の扉が蹴り破られた。

「目標を発見！ これより確保する」

警官は自分に近寄ってくるソルジャーがまるで死神のように見えた。瞬間、ソルジャー達の体は突然後ろに吹き飛び、爆散した。

《CLOCK OVER》

それとほぼ同時にゲイザーがちょうどソルジャーと自分の中央位の位置に現れた。警官は自虐的な笑みを浮かべながらゲイザーに向き合った。

「なんだよ……なんで助けに来たんだよ？ 化け物になっちまった俺を助ける意味なんてないぜ」

「問題ないです。仮面ライダーもその起源は怪人なんですから」

「きつい冗談を言っな」

せせら笑う警官を意に介さずにゲイザーは喋り続けた。

「冗談ではありません。彼らは悪の尖兵となるべく改造され、人ではなくなった。だけど、彼らはそれでも自らの意思で正義を貫くために孤独に耐えながら戦う道を選んだ。怪人ではなく仮面ライダーとしてです」

真摯に語るゲイザーの言葉に警官は次第に耳を傾けていった。

「要は、あなたがなんであろうとするのかが大事なんです。自分がどのように生きるのか決められるのはあなただけです」

「……………。俺は市民を守る警察だ。組織の人間としてその職務は全うしなければならぬ」

警察はそう言って立ち上がり、右手に剣、左手に盾を装備したアルマジロオルフェノクに変身した。ゲイザーはそれを見て1枚のカードを取り出した。

「この状況だとやっぱり土見稟のカードだな」

《KAMEN RIDE: FAIZ》

ゲイザーは電子音と共に赤いラインの走る黒スーツに銀色のボディ
アーマー、ギリシャ文字のをモチーフにした仮面を身につけたG
ファイズに変身した。

「行きますよ」

「ああ」

2人は病院から裏口に飛び出し、ソルジャー部隊に斬りかかった。
アルマジロはそのスペック差もありソルジャーを少しずつ壊滅させ
ていった。そこに慌てた様子のアクセルがやってきた。

「遅いですよ、照井さん」

「すまない、敵の足止めを食らっていた」

「あの赤いライダーが照井刑事!? 自分も未熟ながらお手伝いさ
せていただきます」

「お前は……分かった。無理だけはするなよ」

「はい!!--」

そんな空気をぶち壊すように疾走態のオックスオルフェノクがやってきた。

「愚かな……。オルフェノクとして覚醒しながら人外の討伐に参加しようとするとは」

「無差別殺戮なんていうのは警察の仕事じゃない」

「そうか。ならば、死ね」

オックスが突撃してくるのを3人は散開して回避する。アクセルはバイク形態になった上で支援ユニット「ガンナーA」と合体してアクセルガンナーになった。Gファイズも更にカードを1枚使用した。

《ATTACK RIDE：AUTO BAJIN》

カードの効果によってオートバジンへと姿を変えた刹那のバイクは人形のバトルモードへと変形し、空中からバスターホイールでオックスを牽制し始めた。アクセルガンナーは細かく動きながら主砲でオックスを攻撃していた。

「ちょこまかとッ……」

オックスはその巨体が仇となりの的となっていた。とはいえ人型に戻ろうとすればその隙を狙って集中放火が来るのは間違いない。となれば、取れる選択肢は1つしかない。

「くッ………退却するしかない!!」

「ところがぎっちゃん!!」

《FINAL ATTACK RIDE:F・F・F・FAIZ》

逃走しようとしたオックスの体に回転する赤い三角錐が突き刺さり、拘束する。Gファイズは全力疾走してジャンプし、右足を突き出して三角錐の中へと飛び込み、必殺技「クリムゾンスマッシュ」を叩き込んだ。

「ぐわああああああ!!!!!!」

オックスオルフェノクは の紋章を刻まれ、青い炎に焼かれながら消えていった。敵の消滅を確認したGファイズはアルマジロがいる前で変身を解いた。

「あんな少年が仮面ライダー!? いったいどうなっているんだ?」
「後はよろしくお願いします」

刹那は「じゃあ」と右手を上げた後ゲイズチエイサーで帰宅した。
あまりにもあっさりとした様子にアルマジロは呆然としていた。

「……………」

「後始末は、俺達でやっておく。お前はいったん家に帰れ」

照井もそう言って病院の中へと戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6266p/>

そらのおとしもの～天使と仮面騎士の物語～

2011年11月16日13時21分発行